

EDplace | 100

日本デザイン学会
環境デザイン部会機関誌
EDプレイス 第100号 2025年

目次

巻頭言・EDplace100号のあゆみ：「生」をつむぐ環境デザイン	1
■特集 100号発行記念	
EDplace 一ヒト・モノ・コト・バー 環境デザインのこれまでとこれからについて考える	
————— 2-25	
投稿・能登町宇出津「あばれ祭」と地域研究拠点・宇出津ラボ ～能登半島地震被災の見学報告	26-27
連載・世界の庭園都市 シンガポール、Singapore	28-29
連載・EDeye ワンダーな世界は身近に！	30
報告・清水泰博退任記念展	31
見学・講演会報告「学術研究の展示デザインによる可視化と伝達」	32
事務局報告	33-34

発行日＝令和7年3月31日

発行人＝

森山貴之 t-moriyama@yokohama-art.ac.jp

編集＝

上綱久美子 tandk@sepia.ocn.ne.jp

川合康央 kawai@bunkyo.ac.jp

小泉雅子 koizumim@tamabi.ac.jp

佐々木美貴 mikisans1@gmail.com

◆日本デザイン学会環境デザイン部会事務局

〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町1204

横浜美術大学 教養科目

森山研究室気付

TEL 045-963-4136 FAX 045-961-7371

Mail t-moriyama@yokohama-art.ac.jp

巻頭言

EDplace 100号のあゆみ：「生」をつむぐ環境デザイン

森山貴之（横浜美術大学・環境デザイン部会 主査）

2024年度の部会主査となりました森山貴之です。至らぬところも多いかとは思いますが、何卒よろしく願いいたします。

さて、EDplaceはめでたくも100号を迎えました。ご執筆いただいた皆様、編集をご担当された皆様に感謝申し上げます。現在、100号記念企画として100号分のEDplaceに記録されてきた部会の活動をアーカイブ化する作業を行なっていますが、40年間の文章のなかに部会員それぞれの「環境」への想いや意志を読み取ることができます。

たとえば私は30年前の1995年1月17日に阪神淡路大震災を経験し、生活経済圏としての「都市」が崩壊するだけでなく、なじみ親しんでいた精神的な拠り所、私的な記憶のよすがとしての「まち」を失うという出来事に直面しました。その後

繰り返された各地での災害も、そうした人間の「生」の空間が失われるという出来事にほかなりません。しかしそれは一方で、その喪失感から立ち上がり再び生活を取り戻すという経験でもありました。そのような経験から、私は環境デザインとは、さまざまなデザイン知を駆使しながら私たちの「生」を（再び）つむぐための試み＝「ヒト・モノ・場・自然の関わりあいに関するデザイン研究」（稲次敏郎氏による設立趣旨より）であると考えます。

このような百人百様の想いが凝縮された40年分のEDplaceに向き合っている一方、教育の現場で学生たちと交わるなかで、こうした「生」につながる「過去」の価値が変わりつつあることを痛感しています。とりわけ生成AIの登場によって、過去とはもはやデータであって参照すべ

き「経験」「記憶」あるいは（もしかすると）「知恵」ではなくなっているのではないかと。情報環境の拡張による身体感覚の変容にあって、生（なま）の経験や記憶をどう価値化できるか、日々の授業の中で常にその問題を考えさせられています。

EDplaceのアーカイブは「過去」の環境デザインの集積ではありますが、部会員が「環境」を思考し実践した記録であり、そのすべてにデザイナー、研究者、教育者としての想いがみ取れる、すばらしい価値をもったものです。この「思い」を次代につなぐことを私の個人的な使命として心に刻みつつ、部会員のみならず皆さまのご協力とともに活動して行ければと存じます。

EDplace - ヒト・モノ・コト・バ - 環境デザインのこれまでとこれからについて考える

EDplaceは、日本デザイン学会環境デザイン部会の機関紙として1985年に発行して以来、今号で100回目の発行となる。100号発行記念特集では、「ヒト・モノ・コト・バ」の切り口で構成した。これは、巻頭言にある本部会設立趣旨と2012年本部会発行の書籍「つなぐ 環境デザインがわかる」で示している概念に基づくものである。ヒト・モノ・コト・バとつながることによって、EDplaceが歩んだ100号のこれまでと環境デザインのこれからのトキ（時）の流れをとらえたい。

1. ヒトに聞く

1-1. 黎明期の先生方

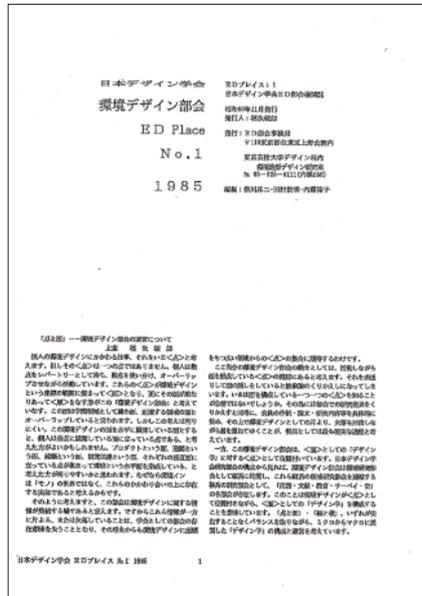
環境デザイン部会の黎明期（1985年～1995年頃）にご活躍されたお立場より、質問にご回答いただく形式で執筆をお願いした。

質問項目

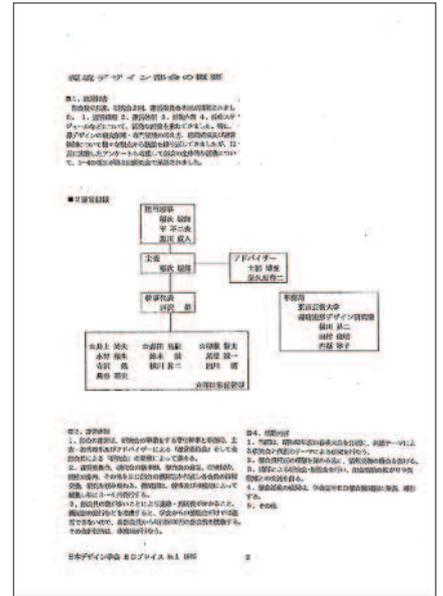
- Q1. ご経歴をご紹介ください。
- Q2. 環境デザイン部会の創成時に環境デザイン部会分科会構成メンバーとしてご活躍されていた当時の活動などについて、教えてください。また、1985年～1995年頃の環境デザイン部会や環境デザインの動向について個人的なお考えなどをお聞かせください。
- Q3. 環境デザイン部会とEDplaceのこれまでと、これからに期待することをお聞かせください。
- Q4. 貴殿にとって環境デザインとは何ですか？

注：

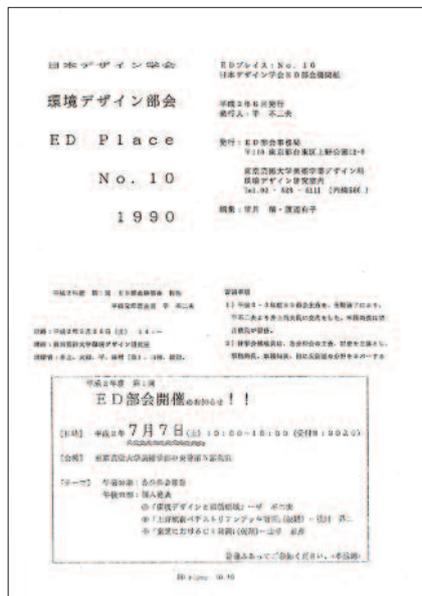
- ・質問を元に独自項目で執筆いただいた場合は原文を掲載している。
- ・長谷高史氏には主査としての質問も兼ねている。



EDplace 1号 表紙 1985年（昭和60年）発行



EDplace 1号より 環境デザイン部会の概要



EDplace 10号 表紙 1990年（平成2年）発行



EDplace 18号 表紙 1995年（平成7年）発行

経歴

1964年 東京藝術大学美術学部工芸科 (ID) 卒。カーデザインに従事した後、1968年、金沢美術工芸大学へ転じ、工業デザイン専攻専任として教育・研究職に就く。1996年学科改組により環境デザイン専攻担当となる。2006年定年により同大学・大学院教授を退任、名誉教授となる。主著：同年、共編著『環境デザインという文明』。主作品：「七色ガラスタワー」2001年度日本デザイン学会作品賞受賞。2022年 滞在型 Art Gallery「カミーノ」をセルフビルド～運営。日本デザイン学会名誉会員・功労者。

私の「環境デザイン」ーリベラルアーツとしての役割ー

私は、環境デザイン研究部会の活動にはあまり貢献していない。しかし部会の草創期からの会員として、また金沢美大に環境デザイン専攻を立ち上げた当事者の一人として、思うところを記しておきたい。

まず、草創期のことで思い返すのは、稲次敏郎氏から聞いた「学会で環境デザイン部会を立ち上げる話が出た時、すぐにID部会を作る動きが出た」ということだった。ボタンのかけ違いというか環境デザインに対する社会一般の認識のずれのようなものは、すでにこの時点からあったのだ。そもそも、なぜ環境デザインが叫ばれるようになったのか。それは産業革命後の世界が到達した近代化を推進する過程で、多くの専門分野が細分化され先鋭化していった結果がもたらす欠陥に人々が気付いたからに他ならない。では研究部会設立の中心人物であった当の稲次氏はどのように考えておられたのか「環境デザインは環境を構成する諸要素の相関性ー『関わり合い』のうえに存在するものである。すなわち環境は建築デザイン・屋外デザイン・インダストリアルデザイン・ビジュアルデザインなど、多くのデザイン領域が交錯し、多様に輻輳して形成される。それらデザイン諸要素を一つの秩序のもとに関連付け、構成に

脈絡を与えて『まとまり』とすることに環境デザインの意義は存在する。」とあって、空間系を意味することが多い今日の解釈とは異なり、広くデザインの全てに関わる問題として提起されているのである。では現在、全国にある70を超える大学・短大で開設されている環境デザイン(学科、コース、専攻等)はどのように構成されているのだろうか。建築・環境系が27、住居学系8、土木系7、美術系8、造園・ランドスケープデザイン系で23となっている (Google検索による)。

このように領域としては確かに空間系が多いのだが、中には建築・インテリアと並んでプロダクト、デザインプロデュースなどからなる設置例²⁾があるが、新しい可能性を感じさせるものだ。他にも各大学によってさまざまな工夫が見られるが今後、それぞれの大学がどのように育って行くかが楽しみである。

なお建築系27大学には金沢美術工芸大学が入っていたのだが、残念ながら2023年度からは学科再編により消えてしまった。その理由の一つは、一級建築士の受験資格に絡む国の基準が、デザイン学科の中の一コースとしては荷が重すぎたということのように思われる。であるなら、建築を主体とする環境デザインは、日本では「学科」以上の組織単位でないと成立しにくいと言えるだろう。

ここで、私が今年旅先で体験した小さな環境デザイン事例を紹介し、その意義を再考してみたい。マドリードの小さなホテル室内でのことだが、卓上に紙袋に入った木製カトラリーが置いてあった。その未晒しの紙袋にはFSCという文字が読み取れたが、木製ゆえ軽く、旅に持参してよし、町で食品を買ってきて使った後は燃えゴミとして捨ててもよしというものだ。従来の使い捨てプラスチック製品に代わるSDGs該当商品だろうとは思ったが、詳しく調べてみると「FSC (Forest Stewardship Council) 認証とは、適切に管理された森林から生産された製品を認証する制度であり、このマークがついている製品は森林の生物多様性や地域社会、

先住民族、労働者の権利を守りながら生産されたことを意味しており、SDGsの17の目標と169の項目のターゲットに対して、FSCはその中の14目標、40項目に貢献する³⁾ のだという。これを見て私は天啓を得たように感じた。これで、使い勝手や美しさなど従来のグッドデザインの要件を満たしているなら、これぞ環境デザインではないのかと。こうした思考を経て、私には新たな環境デザインの意義が見えてきたように思う。すなわち環境デザインは、領域を越えて広く学生たちに学んで欲しい知識であるということだ。先ほどの木製カトラリーでいえば、それはプラスチックの使い捨て製品に代わるものであり、世界的にプラスチックによる海洋汚染が危機的状況にある今日にあって、デザイナーや生産者だけでなく、すべての人がそれを認識している必要があるからだ。こうしたことから、私は環境デザインはリベラルアーツの一つとして広く大学教育に取り入れられることが望ましいと考えるに至った。そうした教育を経た上でより専門的にデザインを学べるようにすれば地球規模で思考することのできるスケールの大きな人材を育てることができよう。そのためには今後、従来のデザイン理論を再構築し、地球規模での関係性を踏まえた、新たな環境デザイン論が必要に思われる。当研究部会の役割は重い。

注

- 1 稲次敏郎『環境デザインの歴史展望』山海堂1996
- 2 昭和女子大学ホームページより抜粋。
- 3 jp.fsc.org より抜粋。



Q1. 略歴

多摩美術大学卒業、剣持デザイン研究所デザイナー、クランブルック美術大学院修了、バーディック・グループ主任デザイナー、州立ワシントン大学美術学部助教授、千葉大学工学部助教授、千葉大学大学院工学研究科教授、東京大学工学部非常勤講師、博士（工学・東京大学）、千葉大学名誉教授、金沢美術工芸大学大学院特任教授、デザインスタジオTAD代表、現在「多様な人々のためのデザインを、ともに」のボランティア活動中。

Q2. 1985年～1995年頃の環境デザインの動向についての個人的な経験

1985年といえば、私のデザイン観が大きく転換し始めた頃だ。米国フィラデルフィア美術館発行の「JAPANESE DESIGN—A Survey Since 1950」に6ページにわたって紹介された私の「作品」は、いずれも、10年余りの米国滞在中に発表・受賞したもので、所謂「製品デザイン」。日本に居た頃からのデザイン観によるものだった。ところが、多様な人種や文化背景を持つ人々と住む米国で私が興味を魅かれたのは、公共の場における人々の行動の多様さやその基盤となる心理関係である。そういう状況に対応する環境のデザインや関連の出版物も目を引いた。1987年に帰国し、千葉大学工学部デザイン工学科に赴任したのを機に、人の居場所や行動支援に関するデザインについての調査や試みを行い、「高齢化と製品環境」「エコ・インテリア」などの翻訳を通して海外での関連デザインや研究の動向を紹介し始める。かつて市場中心だった日本のデザイン界も、巾や深さを

増し、研究者やデザイナーたちとの情報交換の場も増え、学会関係では、「現代日本における平座位姿勢のとられ方」等を発表。それらをまとめた学位申請論文によって博士（工学・東京大学）が授与された。同じ頃、「行動・文化とデザイン」「オフィス環境の行方」「環境をデザインする」「ふれあい空間のデザイン」なども執筆。私にとって、デザインは「作品」をめざすものではなくなっていた。

Q3. 環境デザイン部会とEDplaceのこれさらに期待すること

環境デザインは中広いだけに、学会の機関誌には、多様な研究テーマと報告が登場して、楽しませてくれる。もちろん、そればかりでなく、掲載されたタイトルの中から、自分の追求しているテーマに関連する報告や紹介を見出すというのが本来の目的ではあるけれど、タイトルからだけでは把握できないこともあり、時間の無さを口実に、掲載された全てに目を通すこと無しに、次の号の発行を迎えてしまう、という情けない現実がある。そこで、編集サイドがある程度トピックごとにまとめてくださるのが救いとなっている。環境デザインに関わっているのがどんな方々なのか知りたいと考えていたので、100号記念の今回の企画で、多くのメンバーが、いわば自己紹介的な文章を寄せるというのは、ありがたい。今後、できれば、領域ごと、トピックごとに、興味を持つメンバーが集って情報交換できる場を用意していただけると、さらに助かる、なんぞと企画・運営に関わる方々に甘えてしまう私がいる。申し訳ありませんが、よろしく願います。

Q4. 私にとっての環境デザイン

環境デザインは、人の居場所に関わる配慮と云えるだろう。とは言え、人も多様なので、一律な対応は避けたい。私は2歳のときに患った小児マヒの後遺症で左足首が曲がり、筋肉が萎縮したために片足だけ細く、短いズボンが制服だった小学校に通学していた頃は、登下校路での人目が気になったり、海への遠足が苦痛だったりした。成長して、長ズボンをはくようになってからは、見られているという意識は薄くなり、逆に、公共空間で出会う人の行動の背後にある見えないものを知りたいと思うようになる。10年余り米国で暮らしていた間、多様な人種や文化背景を持つ人々の行動や心理に興味を持ち、その居場所づくりに関連するデザインを知った。帰国後は、観察と実験を基にして、子どもの足乗せを備えた一緒に本を読む椅子や、上半身の姿勢を保持できなくなった高齢者のための椅子、多様な人々が多様な寛ぎ方を可能にするロビー用ベンチ、観光地客を誘致する花づくりの里のルートや方法を地元の人々とともにつくるプロジェクト、車椅子や杖をつく高齢者が椅子に腰かけたまま、あるいは目の不自由な人たちが、ともに野菜や花を育てるプランターの開発、地球に優しい素材と手法を用いた照明システムの開発、などを行って来た。私にとっての環境デザインとは、地球も含めたともに生きる場を、ともに工夫し、望ましい場にして行くことだ、と考えている。

●



左：車椅子や椅子に坐ったままの協働栽培
右：目の不自由な人々による協働栽培



Q1.

東京農業大学グリーンアカデミー校長
東京農業大学名誉教授
1979年東京農業大学農学部卒。博士（農学）。東京農業大学助教授・教授、エクステンションセンター長、UCバークレー校客員研究員、文化庁文化財調査員、日本庭園学会会長等を歴任。専門は造園学（造園デザイン史・庭園論）。日本国内外の日本庭園研究など。著書に『日本の庭・世界の庭』（農文協）、『Japanese Gardens Outside of Japan』（日本造園学会）等。

Q2.

1982年4月にデザイン学会入会。2022年4月退会です。農学分野が原点の造園学（ランドスケープ・サイエンス）が専門ですが、デザインに興味があり農大講師だった筑波大学教授高山正喜久先生の紹介で入会。その後、環境デザイン部会が創設され参加。80年代初頭は「環境デザイン」が流行しており、その中身を議論する会（環境デザインとは何か？）が（社）日本造園学会でもありました。

部会設立当初は、（一社）ランドスケープ・アーキテクト連盟会長の戸田芳樹さんも部会員でした。もちろん、主導役は東京藝大の稲次敏郎先生やGK設計の西沢健さん、筑波大学の平不二夫先生らです。

部会発足当初の第9回春季大会は「環境デザインの視点と特質」がテーマで、パネルディスカッション「環境デザインの視点」を建築家の井上尚夫さんと司会進行しました。（デザイン学研究1989年70号）また『パブリックデザイン事典』（産業調査会、1991）の編集執筆もいい刺激でした。編集は稲次委員長・西沢副委員長、総合ディレクターに長谷高史先生、委員の方々にも事典編纂、部会活動でお世話になりました。「環境デザイン」の広がりを一冊にした本でした。執筆者も当時、環境デザインに関わる研究者・実務家が担当し、執筆者一覧にも1990年前後の環境デザイン研究・実践の広がりが見て取れます。事典付属のセイムスケール年表（同縮尺平面図を年表化）2枚は長谷先生の労作にして今見てもためになるい

い仕上がりです。

Q3.

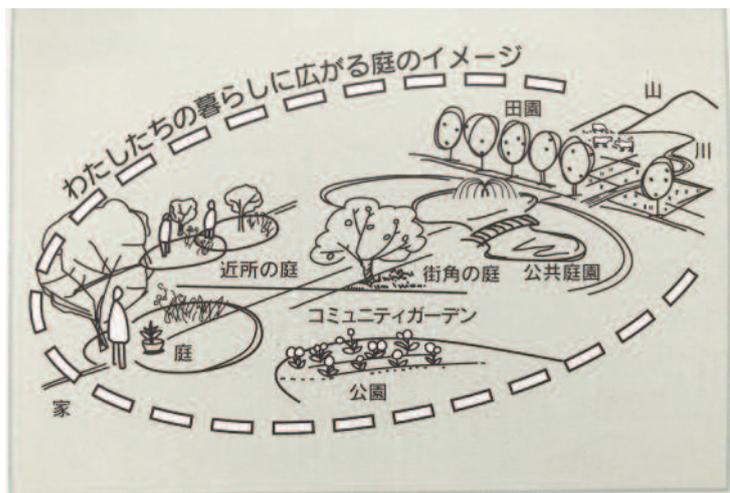
環境デザイン部会では、芸術系、デザイン系の研究者・デザイナーの方々との交流で、いろいろと学ばせていただきました。ありがとうございます。特に、環境デザインとは何か、といった部会発足時に共通認識を得るために共有させていただいた時間に感謝しております。その交流の場として、集まって語ることの他に、EDplaceという情報媒体があったか。特に、卒業制作などの掲載と閲覧を通じて時代の潮流（デザイン思潮か？）を感じさせていただきました。編集を長年務めてこられた方々、そして現在編集の任に当たられている方々に感謝申し上げます。

Q4.

環境デザイン部会参加当初、主査の稲次敏郎先生のご著作や、お話しから「環境デザイン」の概念が、私自身が考えていたランドスケープや都市デザインの世界だけでないことを自覚させられました。インテリアから続く外部空間、あるいは調度品や身の回りの（大も小も・内も外も）モノ・コト・ヒトとの関係性など。それも、内から外へずっと続いている関

係性としての環境デザインです。（図参照）概念的なことですが、この考え（感覚）は、ちょうど先日拝見した清水泰博先生の退官記念展、またそのご著書『すべてが庭になる一人の居場所をつくる』に語られる、清水先生の環境デザイン観と同じような気がしています。幸い（?）、コロナ禍の時期に読み直す本が稲次先生の著作でした。今読んでもいい内容で、昨今やっと同様な庭園観をもった著作が日本庭園学会賞（2022）を受賞したのですが、その内容より30年以上も前に既に稲次先生がお考えになっていたことです。

また、東京藝大の藝大ヘッジのプロジェクトにも、藝大を中心とした環境デザインの考えが柵（柵?）を超えて実践されていることを実感しています。それを感じられてとても満足に思っております。今年2024年は稲次先生の生誕100年記念の年ですが、個人的に今年存命なら100歳を迎える恩師にあたる方々が多いことに驚いています。稲次先生とも親交のあった鈴木忠義先生、作品が環境デザインともいえる伊藤邦衛先生たちです。



地域に広がる「わたしの庭」(テリトリアルガーデン)

2000年代以前に思い描いていた環境デザインの領域。
稲次敏郎先生の概念に共鳴し、清水泰博先生の概念にも通底していた。
初出は2000年のIFLA、この図は鈴木誠『日本の庭・世界の庭』（農文協、2005）p.31

Q1. 経歴 所属

東京藝術大学工芸科ID専攻卒業、同大学院ID修了。ID専攻助手、講師を経て環境造形デザイン専攻設立に参画、講師（～1994年）。長谷高史デザイン事務所を1980年設立後現在に至る。2004年より愛知県立芸術大学教授。現在、長谷高史デザイン事務所代表、愛知県立芸術大学名誉教授。日本デザイン学会名誉会員、日本インダストリアルデザイン協会監事、特別会員、都市環境デザイン会議特別会員等。

Q2. 環境デザイン部会の創成時に環境デザイン部会分科会構成メンバーとして

当時、私は東京藝術大学の環境造形デザイン専攻の講師をしていました。日本デザイン学会事務局を藝大が引き受けて3年目になる頃で、学会の広報物の封筒入れや切手貼り、郵送などを3ヶ月に一度作業をしていました。環境デザイン部会が創設され、部会員はやる気に満ちていました。環境という新たな視点から様々な領域からの参加者があり、魅力に満ちていました。ベースとなりましたデザインサーバー部会からの参加が多く、基礎・視覚、色彩、機器、インテリア、エクステリア、造園、デザイン史等多彩でした。



パブリックデザイン事典

分科会も活発に展開され、用語分科会、教育分科会、方法論計画論分科会、文献資料分科会横軸に、領域を屋内、屋外、視覚情報を横軸に構成され、それぞれで分科会を開催、その成果をEDplaceに投稿していました。この投稿は所属する部会員にとっては大きな情報源となり、それぞれの研究分野で役立つ資料になりました。その後1991年に刊行されたパブリックデザイン事典は、この分科会員に多く執筆いただきました。その後1995年に実施されたアンケートによると部会員の所属する他の学会や協会、研究団体が70を超していました。環境に興味を持たれた研究者の多さに驚きました。

このように部会創生期は、様々な試み、見学、研究会に参加者の熱意がとても刺激的でした。

Q3. 主査をしていた当時の部会活動及びEDplaceの思い出

部会設立時より参加し、EDPlaceの1号より関わり100号となりその重みを感じます。主査は数回させて頂きましたが、最初の主査の際に、小泉雅子先生にお願いして、部会活動を見える化するには、広報の充実が一番と考え、デザイン学会の部会機関誌としてデザインが一番と考えてお願いしたことが今では成功の基盤となりました。また、私が学会で進めた作品の論文と同等として作品集の創刊に至りましたが、EDPlaceでも同様に卒業作品、修了作品の特集号を作り、各大学のデザインの特徴も見える化できたと思います。又、部会での『環境デザインがわかる』の出版ができたことが一番の成果だと自負しています。

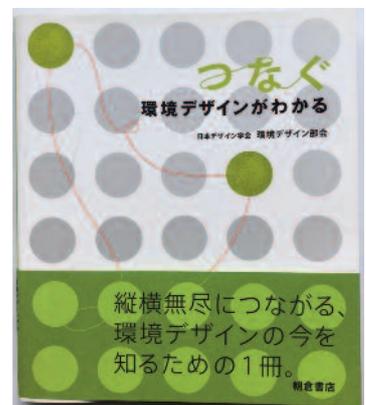
Q4. 環境デザイン部会とEDplaceのこれまでとこれから期待すること

コロナ禍の3年間は部会活動においても至難な時でした。見学会やシンポジウム等も開催できずでしたが、そんな中でもEDPlaceは発行されたことは部会活動の基本だと気づかせてくれました。部会員の高齢化が話題に上りますが、新たな部会員の獲得にもEDPlaceは良いツールになります。24年度の秋季大会の学生

プロポを拝見しても環境系の発表がとても多く、若い部会員の獲得に期待が持てます。出来たら、卒業作品特集号だけでも学会員または所属する大学や研究機関に配布出来たらと思います。又、部会選出の理事の皆様には、理事会や地方大会時に新たな部会員の獲得に努力いただきたくお願いします。学会員でも、部会に参加される方は少なく、勧誘を待たれている状況かと思います。現在部会で活躍されている方の何人かは私がお誘いした方々がおられます。是非勧誘をお願いします。

Q5. あなたにとって環境デザインとは何ですか

部会設立時の定義が、『ヒト、モノ、バの快適で美しい関係作り』でしたが、現在では、『ヒト、モノ、バ、トキ、コトの快適で美しい関係づくり』と時代とともに変化してきました。ここに掲げた定義を基に、様々な領域での環境デザインが、様々な展開することを目的としています。このことから方法論も様々なアプローチがあることから、益々魅力的な研究領域と考えています。現在の部会員も専門領域が多様であり、そのことが環境デザイン部会が活性化している要因と考えています。様々な領域からのアプローチによる問題解決には、いつも新しい発見があります。この楽しさを是非会員に享受して頂きたいです。



つなぐ 環境デザインがわかる

Q1.

1976年九州芸術工科大学卒業、1979年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程デザイン専攻修了後GKインダストリアルデザイン研究所環境デザイン本部、1982年GK設計（環境デザイン本部法人化）環境設計部、1992年GK設計環境設計部長退職後、九州芸術工科大学芸術工学部助教授、2000年同大教授・博士（芸術工学）2003年大学統合により九州大学大学院芸術工学研究院教授、2019年同大学定年退職、現在、九州大学名誉教授／グッドデザインフェロー

Q2.

1992年から福岡在住の立場で主にEDプレイスの寄稿を行なった。1997年EDプレイス第22号「福岡・博多の環境デザイン」では、日本デザイン学会環境デザイン部会の平成9年度春季部会が、福岡市において実施されることに際し、福岡市の環境デザインの現況についての紹介記事を作成した。福岡市の歴史的背景から、特に都市環境整備の契機ともいえる1989年のアジア太平洋博覧会以降の事例を、ウォーターフロント、都市機能、交通アクセス、リゾート・レクリエーションの各プロジェクトに分けて解説し、天神開発、キャナルシティ、リバレイン博多などの開発による「歩いて巡る街く福岡・博多」の環境デザインを考察し、第23号で「平成9年度春季部会・福岡を振り返って」を寄稿。2004年第40号「双子都市・福岡を繋ぐ橋のデザイン」では、古来から水の都として栄え、特に中世期は、博多商人が活躍する博多部と武士の町・福岡部の双子都市を形成してきたことや、都市と水の関係についての歴史的変遷について論考し、筆者がデザインに携わった、博多部と福岡部を結ぶ西中島橋を例に、文化を繋ぐ橋のデザインのあり方を記した。2005年第43号巻頭言でパブリックデザインにおける副菜（脇役的）のデザインの重要さを「美しい景観をひきたてる副菜のデザイン」で記した。

Q3.

環境デザインは、感性と理性の融合に

よってより良い生活環境を創り出す役割を担っている。本稿では「環境デザインの感性と理性の融合」の“かたち”を、これからも広報する環境デザイン部会の持続的活動を期待して記したい。

日本の戦後の近代合理的な「技術」優先の時代が置き忘れていた生活、社会の「こころ」を「ひと」として読み取り「こころ」を「美しい“かたち”」に可視化することが肝要である。そのためには、わが国の先達が残した、「感性」と「理性」の調和、「感性」の連鎖（コミュニケーション）による共助、「感性（ひと）」を物語る「もの・ば（空間）」と「こと（情報）」そして「時間」の関係による価値創出、などのわが国の「美しいかたち」からの学びこそが、「感性」を学と成す手がかりになるのではないかと考える。

感性を可視化するための手法として環境デザインがある。環境デザインとは、人々の生活の観点から物的要素（もの）と事柄（こと）、そして環境（ば）との関係を、機能と感性の融合によって統合化し、「もの、こと、ばの関係の価値」を“かたち”に可視化し事業に結びつけることである。環境デザインは、科学技術の進展により高度化・個別化する要素技術を、生活者の立場から社会状況を見据え、安心・安全な生活の利便・適応を満足させ、心地・感動を与える魅力的な物的・質的環境に変換・統合する感性価値形成プロセスと定義できる。

Q4.

環境デザインの一領域となるパブリックデザインの方法について記すことにする。パブリックデザインは、感性価値形成のための関係のデザイン「ひと、もの、こと、ばの魅力で最適な関係をデザインする実践的方法」の一つである。私たちの生活を支える街の街路、公園、施設などの公的空間（パブリックスペース）は、利用者にとって魅力的なさまざまな要素が用意されることによって快適な場を提供している。快適な場をかたちづくるためには、パブリックスペースの多様な要素の秩序化と個性化の方法を検討す

る必要がある。秩序化のためには、例えば街路に無秩序に設置された諸要素を整理することからはじめなければならない。個性化のためには、例えば街路の環境特性にあった性格づけを行い、その性格づけから必要とされる要素を選び出し、要素相互の協調したまとまりのある魅力を導き出すことが求められる。要素の一つひとつがいかに優れたデザインであっても、要素相互の調和がとれていない場合は、ちぐはぐな街のデザインとなる。そして重要なことは、個性化のためには、秩序化が欠かせない前提条件となり整理された環境の中ではじめて個性的で魅力的な場をかたちづくることのできる。つまりパブリックデザインは、機能的マイナスの「秩序化」デザインと感性的魅力の「個性化」デザインの関係のデザインといえる。以下に著者によるパブリックデザインの実践事例2件を掲載する。



西新宿地区サインリング：1992年（東京都新宿区）交差点の個性的なサインサークルに信号機、照明、標識などを集約し個性化した、おそらく世界で最初の事例となった。このサインリングが、映画「君の名は。(2016-2017)」のシーンで取り上げられたことで話題となった。



JR博多駅博多口駅前広場：2011年（福岡市博多区）調和と魅力の駅前広場をかたちづくるために、広場を構成する多様な要素の関係のデザイン“秩序化と個性化によるパブリックデザイン”方法を適用した。

Q1.

1972年武蔵野美術大学造形学部卒業後渡仏、フランスのカラリスト、ジャン・フィリップ・ランクロ教授のアトリエで環境色彩計画を学ぶ。その後、日本各地の環境色彩調査を行い、地域色を活かした色彩計画を数多く実践してきた。(有)クリマ取締役、2021年まで武蔵野美術大学基礎デザイン学科教授。著書に“まちの色をつくる…環境色彩デザインの手法”、“景観法を活用するための環境色彩計画”などがある。

Q2.

環境デザイン部会創成時の1985年頃はカラープランニングセンターでカラリストとして仕事をしつつ、環境色彩計画の会社クリマを立ち上げた時期でした。その時期は兵庫県で大規模建築物の外装色を調査し、その分布状況を明らかにして“兵庫県景観条例色彩指導基準”を策定した頃です。建築物の外壁色を色値で把握し、その色彩分布現況を活かした数値基準は、その後多くの自治体で採用されました。兵庫県ではその後も県内に残る歴史的なまち並みの調査を行い、その個性的な色彩を記録して景観形成地区の運用に役立てていきました。このような科学的な調査資料をまとめたことが、当時の環境デザイン部会の景観検討手法にも有効だと判断されて、検討会に招かれたのだと思います。1985年から90年の間は、景観形成を先導した兵庫県の仕事のほか、藤沢市でも江ノ島の環境色彩調査と色彩基準の策定を行っています。色彩基準は歴史的なまち並みが残っている環境で、個性的なまとまりが見つかりやすく、そのまとまりを活かした色彩基準は地域にも受け入れられました。このような歴史的なまち並みの色彩基準策定の他、川崎市の都心部アーバンデザインの色彩調査・提言も行いました。特徴がないと思われていた川崎都心部に明るい高明度の建築物が多いことを調査によって証明し、再開発地区の建築物の外装を“白基調のまち”をつくる色彩へと誘導しました。

Q3.

景観法の中でも、色彩を数値化して運用する方法は優遇されていると思います。しかし環境色彩基準の策定が日本の景観を格段に向上させたかという点、残念ながらそのようにはなっていません。兵庫県でも色彩指導基準を策定する際に議論があり、建築の外装は設計者に任せられた方がその素材との関係も考え抜かれた質が良い色が選ばれる方がよいのではないかと意見もありました。しかし、当時新しい表現の可能性のみを追いかけて、地域の景観が乱れるという事例も増えていたので、都市景観条例を策定して大規模建築物の色彩誘導を始めました。この色彩基準はこれまで長い時間をかけて蓄積して来た日本の都市の基調色と著しく異なる色彩は景観審議会等の議論に載るようにした仕組みです。これはネガティブチェックであり、この色彩基準でまちの個性が創造されるわけではありません。最近、多く建設される集合住宅等は法的に許容する容積率を最大に使い、その分、景観的な配慮が欠けていること多く、色彩についても景観法で定められた色彩基準の範囲以上に地域の景観を向上させるために工夫することが少なくなっているように感じます。兵庫県の色彩指導基準は二本立てで、大規模建築物の色彩はネガティブチェック型ですが、景観形成地区では、大規模建築物も詳細に地域の個性ある色彩を育てる工夫をします。今後の景観形成を確実に進めるための方策を環境デザイン部会でも議論すべきだと思います。

Q4.

大学ではデザインを学んだので、プロダクトデザインやグラフィックデザインという領域はある程度理解していましたが、その頃始まっていた都市デザインという動きはよく知りませんでした。しかし、私達の学科はドイツのウルム造形大学のカリキュラムを研究して組まれていたので、社会性を大切にしたいソシオデザインという領域は意識されていました。卒業後フランスに行き、パリにあるアト

リエで環境色彩計画を学び、まちを歩いてその景色に触れた時に、人々が自由に決めているような住宅の色彩も、永い年月の中で育まれてきたことが分かりました。東京のように様々な色彩が溢れているまちも面白いかも知れませんが、そのような環境では真のまち並みの個性や美しさは育ちません。最近東京に建築される集合住宅は一昔前の木造アパートよりもきれいになったと思いますが、緑化を怠り、地域の潤いが減少することも少なくありません。環境デザインは住み続けたいまちをつくるのが重要だと思います。建築が刷新されて、一見便利で綺麗なまちが増えているようにも見えますが、地域に在った自然を感じることは少なくなっています。ヨーロッパのまちを見ると地域の川や海に触れあえる空間が豊富にあります。私の家の前には農地に引かれた水路が残っていますが、今は安全のために高いフェンスで囲われています。便利さと経済性だけを追求しても住み続けたいまちにはなりません。



①環境色彩計画ではいつも色彩調査を行い、そこに蓄積された色彩を知ることから始める。中国大同の環境色彩調査



②色彩調査の結果を、地域の人たちに知ってもらうように工夫する。中国大同の環境色彩調査報告会

1-2. 歴代主査

環境デザイン部会の主査をされたお立場から、質問にご回答いただく形式で執筆をお願いした。

質問項目

- Q1. ご経歴・現在の所属などご紹介ください。
- Q2. 主査をされた当時の部会活動やEDplace発行について思い出やふりかえりなどお願いします。
- Q3. 環境デザイン部会とEDplaceのこれまでと、これからに期待することをお聞かせください。
- Q4. あなたにとって環境デザインとは何ですか？

中嶋猛夫

1. 経歴

女子美術大学名誉教授、学術博士。
日本デザイン学会名誉会員、功労賞受賞。
1972年東京芸術大学美術学部ID卒業。
1972～1975年京都植藤造園伝統庭園修行。

1975～環境デザイン設計実務を続ける。
1985年東京芸術大学大学院博士課程修了。
1990～2014年女子美術大学専任教師。

2. ED部会発足当時

東京芸大の稲次先生、武蔵美の向井先生、筑波大の平先生などが活躍され、私も参加しました。私は既に学会員で大学院の博士課程を修了し芸大デザイン科の非常勤講師でした。主査の期間は二期で、2000～02年で30～35号と2006～08年の48～53号を発行。ED部会発足当時より幹事に名を連ねて来ましたが1995年に「阪神淡路大震災」が起きて、当時企画担当だったので急遽大震災をテーマに現地調査とシンポジウムを開催しそれらを学会特集号に纏めて、それ以降、日本は災害多発国で震災や災害がED部会の主要テ

マの一つに成りました。

3. ED部会とプレイスに関して

昨今は若い世代の部会員が少なく、会員の高齢化が進んでいます。その原因の一つに考えられるのは、若いデザイナーや研究者にとって興味ある内容が足りないのではないかと思います。それは「21世紀の環境デザインとは何か？」が問われ、議論が活性化する事が無いからではないでしょうか。

4. 21世紀のデザインとは

デザインは時代のニーズに反映され変化して来ました。近代オリンピックや万国博、近代的大都市などで代表される近代社会システムは「大規模一極集中型」で合理的、経済的とされ、その反映としての近代デザインと共に世界中に普及しましたが、20世紀末には様々なマイナス点が顕著になりました。

21世紀の社会システムは「小規模自立分散ネットワーク型」に変換される事が求められていて、21世紀の環境デザインも根本的論議が必要です。



京都清水寺景観分析 博士研究関連



関わった特集号（景観、災害関係）



両国回向院境内環境整備



防犯防災多機能タワー（ソーシャルユース部門のGood Design受賞）と文部科学省 高校デザイン教科書に選定、掲載される



ノリタケ永久保存作品



デザイン概略変遷史

	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	21世紀
	近世		近代		現代（環境）
社会制度	封建制 (王侯貴族) 多種分立制	[市民革命]	民主・資本主義 (国民・国家) 大規模一極集中制		(市民・地域住民) 小規模自立分散 network 制
生産制	徒弟制 手工業	[産業革命]	機械工業化 少品種大量生産		[IT革命] 多品種少量生産 個別対応生産
造形価値 GoodDesign	華麗装飾		装飾排除 (単純化) Simple is Best		有機的形狀 Hearthy&Natural
繁栄国	フランス	→ 英国	→ 米国	→	東アジア
エネルギー	薪・炭		石炭	石油	クリーン・再生 エネルギー



21世紀は「小規模自立分散ネットワーク」の環境デザインの時代

清水泰博

Q1.

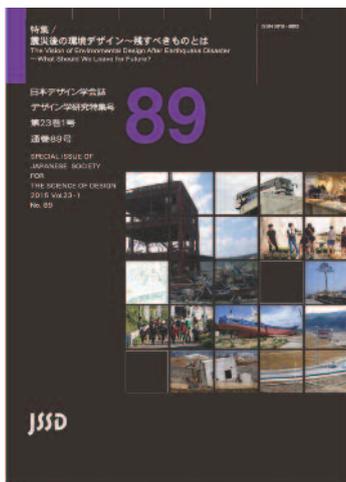
東京藝術大学大学院環境造形デザイン研究室を1983年に修了。その後黒川雅之建築設計事務所を経て1987年にSESTA DESIGN設立。2002年より東京藝術大学。現在理事兼副学長（研究担当）、教授

Q2.

私が主査だったのは2012年からと、2018年からの二度になります。2012年からの2年は東北震災後に向けての関心が強く、その中で南三陸防災庁舎の保存に向けた活動が中心になり、「残すべきもの」のO.S.を行いました。その後、セッションの記録に部会員の論考を加えた特集号を制作しました。2018年からは人口減少時代への関心から、これからの環境デザインの方向を部会員の皆さんと探る特集号を制作しました。どちらも時代の流れの中での問題意識だったと思っています。



2013年春季研究発表大会オーガナイズドセッション「震災後の環境デザイン～残すべきものとは」



デザイン学研究特集号「特集／震災後の環境デザイン～残すべきものとは」2015年発行

Q3.

専門領域の近い人たちが集まっている部会活動ですから、それを踏まえた上で個人では出来ない、団体として効果的な活動がメインになるのだと思います。今

までもそうだったと思いますが常にその時、その時代の問題（関心事）をテーマとしていくのがいいのかと思います。歴史に見れば技術革新の中で常に新たなデザインが生まれてきました。現代は今までになかった程の急激な技術開発が次々に新しいものを生み出し世界を変えつつあります。AIやVRがどのような世界を作り出していくのか。これらの新技術は諸刃の剣のようでもあり、そのような中で持続可能な人や生き物や地球の為の環境デザインを考える必要があるように思います。

Q4.

「図」からではなく「地」から考えるデザイン方法論であり、私の実践においては様々なスケールでの「居場所」を考えるPlace Designだと思っています。既存のインテリアや建築、ランドスケープ、都市などのジャンルを縦軸だとすると、それらを横断する横軸の領域です。そこでのテーマは私の場合は「人の居場所」であり、それは広い意味での「庭」とも呼べる領域ではないかと最近では思っています。それぞれの場所の視覚、聴覚、嗅覚、体感で得られる環境情報を読み取り、それらを統合し、その場所に相応しい居心地のいい場所、安らぎの得られる場所、感性に働きかける場所をデザインすること。

山田弘和

Q1.

東京藝術大学美術学部工芸科インダストリアルデザイン専攻を卒業し、後に環境デザイン領域になる稲次敏郎研究室にて同大学院修了。パイオニア（株）デザイン室を経て、1986年、山田弘和デザインオフィス設立。2010年、横浜美術大学開学時に教授就任。2016年、同大プロダクトデザインコース設立。2019年に退任後、現在同大名誉教授、日本デザイン学会名誉会員。

Q2.

大学ではプロダクトデザインコースの新設と重なる多忙な時期でしたが、2015

年に環境デザイン部会が担当した秋季企画大会「デザイン・レガシーの時代」は特に思い出深く、部会の皆様に支えられ、東京芸大での開催が実現しました。EDplaceの発行も部会発足以来続く実績であり、会員交流の有効な場として続けられた「レガシー」と感じています。



2015年秋季企画大会 パネルディスカッション「デザイン・レガシー～残すべきものを変えて行くもの～を問う」

Q3.

大学の常勤職を得た年に入会しましたが、大学の研究とED部会の研究領域を重ねながら、学内共同研究の申請を行い、採択を得たキャンパスサイン計画は、多くの教員との連携により実施に繋がりました。また、この間に出会いを通じて新たな会員を迎えることが出来ました。既存のパラダイムが多様に変化する昨今、環境デザインの領域こそ、ものごとを適正に組み立て直す役割を求められています。EDplaceは、その考え方の共有にも活用される媒体として、更にオープンに利用されることを期待します。



横浜美術大学キャンパスサイン計画

Q4.

学問領域として扱うデザインは、科学・技術工学や電子工学、医学医療など、無限にあるタテ割りの専門分野をヨコに繋ぐ極めて稀有な位置にあると感じます。さらに、環境デザインという視野から見えるのは、地球環境にある自然をベース

に、地上と海洋の生態循環、大気の変動と均衡を保つ都市や林業、農業、水産業、酪農のありかた、交通系や物流系と建築を適正に配置するまちづくりなど、やはりヨコ軸を繋ぐ総合的視点が特徴です。気がつけば、産業デザインという商業中心主義で発展したデザインの概念はピークを過ぎて、時代は環境の視点を軸に、地球環境の循環に同期する長期的ライフサイクルを構想する役割が益々期待されているように思います。

●

杉下哲

Q1.

私は、1981年に東京藝術大学を卒業し(株)GK設計などを経て、2002年に東京工芸大学芸術学部デザイン学科教員に就任後、2023年に定年退職して現在に至り、そのなか、環境デザインを「人とモノと空間の関係」としてきました。

Q2.

環境デザイン部会の運営では、2016-2017年度に主査、2008~2013年度に事務局などで主に活動しました。主査時には第64回春季大会で「これからの仕組み—国産木材とデザイン」を企画・実施などし、事務局時には東日本大震災における視察・提言など年間三部のEDplace発行、部会書籍出版などに奔走しました。自分の興味関心などを探求でき、他者の研究・教育などの広さ・深さに触れられ、私たちの背景となり実践の場となって、感謝しかありません。



2017年春季研究発表大会オーガナイズドセッション「これからの仕組み—国産木材とデザイン」

Q3.

環境デザイン部会は、第1回委員会が1984年7月に開催されて後、40年が過ぎ

ました。人に例えれば不惑です。そもそも部会は、学会自体も、研究・教育にかかわる企画・実施や人的ネットワーク構築ができるなど、活かし方次第で、可能性に満ちています。作品や論文などの成果発表から理事や主査などの役職就任など、部会員が経験や実績などを高める仕掛けとその共有が重要です。仕掛けは、EDplaceを要に、環境デザインで企画・伝え・研ぐ様な、活動の循環が既に備わっており、その時々々の現役の部会員がこの仕掛けを活かし続けることが大切です。これからも、100号にとどまらず、知命、耳順、従心などを迎える様に、迷わず進む思いであり、それを期待します。



活動の循環

Q4.

「私たちは、豊かさや個人の重視などの先にあると信じた幸福を実感することも少なく、どこかおかしいと気づき始めているのではないだろうか。昔の生活に戻り難く、今の生活を手放せないのだが、そもそも私たちは自ら、必要に応じて自在で何物にもとらわれない、融通無碍な可変性に満ちた暮らしを行っていた。それは、デザインの行い方の一つでもあり、見つけ直して今に活かせば、幸福の実感も増すのではないだろうか。」と2012年出版の「つなぐ環境デザインがわかる」に記しました。1957年生まれで、「人新世」を生きてきた私としては今、環境デザインの責任や役割などを特に考えます。拠り所は、「生活」「知足」「内発」など、多いと思っています。

●

山内貴博

Q1.

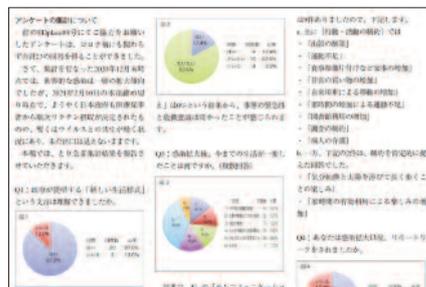
東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了、博士(美術)。秋田公立美術大学を経て京都美術工芸大学教授。主に人々の住まいを創作の基点に住環境に関する調査を行う。

Q2.

コロナ禍の為、オンラインでの活動だった。リモート会議も不慣れで、学会の大会や部会の集まりなど、職場の大学でPCを繋ぎ参加していた。やはり肌感がないので、つくづく対面がいいと思う。また、主査と同時に編集委員も、特に卒業制作特集号を担当した。作品収集は大変だが、他大学の様子を知ることが出来、勉強になった。

Q3.

90号の頃に主査を担当し改めて見みると、コロナ禍の生活や教育の環境変化に関する山田先生執筆のアンケートがある。筆者はマイペースで、その時は理解できず今になって分かる事が多い。その意味で、部会の活動と記録は私の様な人間や不易流行な考えを持つ為にも貴重である。



「新しい生活様式」と環境デザインについてのアンケート集計 EDplace90号 2021年

Q4.

環境デザイン分野の関りは、社会人として無印良品の木の家の開発をしていた頃「場の雰囲気がちがいは何か」という疑問から研究を開始したことによる。2006年に研究を始め、現在は、①建築と外の関係、②格子割街並みのあり方、③水力インフラに着目した川上から川下への都市のあり方、について調査している。以上から筆者にとって環境デザインとは「空間的領域横断」である。

●

佐々木美貴

Q1.

東京藝大大学院卒業後、エムアンドエムデザイン事務所を経て、1994年環境デザイナーとして独立（JR平井駅北口広場・江戸川区三角橋・JH九州日見夢大橋等）。もうひとつの住まい方推進協議会事務局・幹事。2017年～江戸川区子ども未来館指導員

Q2.

EDplace20号より、編集員としてED部に参加。その時々と思う事取材しED-eyeに書いて来た。その中でも、多様な困難にも仲間に対応する知恵を「もうひとつの住まい方」で学び、地域で切り開くことに未来を感じ、EDplace誌上にも紹介してきた。今、その協働の力の広がりを見ることが多くなった。2022年～主査を承り、2年間のリモート幹事会では多数の方と意見交換ができ、やりがいに繋がった。その中ではアーカイブへの道筋ができ、100号記念の展覧会で部会活動を盛り上げる機運になったことに深く感謝する。2023年JSSD春季大会の「葛西沖へのエクスカージョン」の船旅と「葛西沖を考えるOS」で、東京湾のあるべき姿を科学的に学者らとディスカッションしたことは、環境デザインの新しい方向性につながったのではないと思う。

Q3.

EDplace20号から編集員として参加し、自分の身近なことに目を向け、投稿を続けて来た。それが私の「軸」となり、過

去も未来にも「道」となっている。

100号までたどり着けたのは、部会員の皆さまの協力のおかげだ。また、環境デザインが生まれ、それをここまで育てて来られたのは、世の中にこの考えが必要不可欠だったからだ、この40年を振り返って、確信できた。そして、その考え方の先にたくさんの人との出会いもあった。「もうひとつの住まい方」で人とのつながりから生まれる力の強さも知った。

これからも、誰かが誰かに受け繋ぎ、さらに進化を遂げていくように、互いに力を合わせて「モノゴト」を作り上げていきたい。

Q4.

全てのモノが幸せであるための中心にあるもの、と思う。ヒト・モノ・バ・コトが混ざり合っている中で、あるものだけが、排除されることない。

全てのモノのためにあるデザイン。



EDplace 歴代発行人（主査）

稲次敏郎	……	1号	1985年－5号	1987年
平不二夫	……	6号	1988年－12号	1991年
日原もとこ	……	13号	1992年－16号	1994年
望月積	……	17号	1994年－19号	1995年
長谷高史	……	20号	1996年－29号	1999年
中嶋猛夫	……	30号	2000年－35号	2002年
尾登誠一	……	36号	2002年－41号	2004年
長谷高史	……	42号	2004年－47号	2006年
中嶋猛夫	……	48号	2006年－53号	2008年
長谷高史	……	54号	2008年－64号	2012年
清水泰博	……	65号	2012年－70号	2014年
山田弘和	……	71号	2014年－76号	2016年
杉下哲	……	77号	2016年－82号	2018年
清水泰博	……	83号	2018年－88号	2020年
山内貴博	……	89号	2020年－93号	2022年
佐々木美貴	……	94号	2022年－99号	2024年
森山貴之	……	100号	2025年－	



2023年春季研究発表大会 葛西沖へのエクスカージョン

EDplace



もうひとつの住まい方で発行した本／100の事例集の執筆でたくさんの出会いがあった。



2024年8月オンライン総会

1-3. 部会員より

環境デザイン部会の部会員に、質問に回答いただく形式で執筆をお願いした。掲載原稿は、回答のあった有志（五十音順）によるものである。

質問項目

Q1. ご経歴・現在の所属などご紹介ください。

Q2. 環境デザイン部会とEDplaceのこれまでと、これからに期待することをお聞かせください。

Q3. あなたにとって環境デザインとは何ですか？

池田岳史

Q1.

愛知工業大学工学部建築学科卒業、愛知県立芸術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科機能科学専攻修了博士（学術）。現職は福井工業大学副学長、環境学部デザイン学科教授。

Q2.

サウンドスケープに関する研究発表をきっかけに、お誘いいただき部会にお世話になっております。「環境デザイン」を説明することはなかなか難しいと感じています。一方で、その範疇に含まれるであろう様々な分野は、人々の生活に密着しています。対峙から調和へ、「環境デザイン」に関する議論とその考え方の積極的な発信を部会に引き続き期待したいと思います。またEDplaceには、これまでの諸先輩方がそうされてきたように、そのプロセスの記録とまとめ、発信媒体としての役割を期待しています。

Q3.

近年「界限」という言葉が拡張的に使われている。「かわい」を研究テーマの一つとして扱う私としては、戸惑いを覚えつつも、そもそも柔らかな空間的概念であるその言葉の意味を考えれば、それもまた面白いと考えている。さて「環境デザイン」である。これもまた、なかなか柔らかな概念であると感じている。何が「環境デザイン」であるのか、これはここ数年の部会の議論を見ても明確に定義できるものではないし、変化し続けているように感じる。自然に対峙するのではなく、摂理に対して、人間のわがままをどこまで許容してもらいつつ折り合いをつけられるか。自身は、自然に耳を傾けつつ、サウンドスケープの研究を進めていきたい。



樹間のサウンドスケープ

伊藤孝紀

Q1.

94年TYPE A/B設立。00年 北山創造研究所。07年 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科博士後期課程満了、同年より名古屋工業大学大学院建築・デザイン分野准教授。24年よりデンマーク王立アカデミー客員教授



名古屋市栄ミナミまちづくり株式会社と連携した人間中心に道路を再整備したデザイン。

Q2.

環境デザイン部会は、デザインの多様な領域を横断する会員が集い、研究者から実践するデザイナーまで多彩な方々の活動に触れ、交流できる刺激的な場だと捉えています。昨今の社会情勢や技術革新をみても、一つのデザイン領域だけでは解決方法を導くのに限界があると感じています。特に、地域のまちづくりに従事する身としては、エリアマネジメントやプレイス・ブランディングなど広い視野や柔軟な発想が求められる現場に直面します。環境デザインの役割は、地方に行くほど必要とされており、地域の資源となる歴史風土を活かすデザインリテラシーを高め、“Public Mind”を醸成していくことに寄与できると期待しています。

Q3.

建築デザインの出身ですが、建築設計はハコでしかありません。重要なのは、家具・インテリアを中心とした建築の内部空間と、ランドスケープや公共空間といった建築の外部空間を連続的に捉えて、一つの環境としてデザインすることだと考えています。そのため、まちづくりの研究と実践活動では、名古屋圏を中心に行政・企業・市民団体と連携した“エリアマネジメントやブランド戦略”に従事し、社会実験などを牽引しています。ま

た、「歳を重ねても住み続けられる住環境」をテーマに、家具やインテリアの研究と実践にも挑戦しています。そのどれもが、人間を中心に捉え、まちづくりに寄与する「環境デザイン」だと捉えています。



大倉富美雄

Q1.

電機メーカー勤務後、NYのデザイン事務所、ミラノの建築事務所勤務後独立。帰国後（有）大倉富美雄デザイン事務所設立。日本インダストリアルデザイナー協会理事長。静岡文化芸大教授、NPO日本デザイン協会理事長等歴任。東京芸大卒。

Q2.

「デザイン」がモノや空間を含むなら、言葉で表現するだけでは済まない。「美」「くつろぎ」への課題もはらむ。一方、表現力や説得力、コスト、構造や素材、安全・災害・地域・資源などへの対策、受益者、団体活動、法規への対応や情報管理、資本主義経営問題など、「外の問題」も関わる。その分、個人での全体対応には時間と努力が必要だが、それを覚え込むのではなく把握していくことが重要だ。学生には「全体知」への経験として学ばせる必要がある。これらを「社会全体の感性価値擁護」として見れば、誰にでも問われる問題。知財文教政経が共有となる時、理念を越して現場の力をも包括する「感性価値」を、変革の要素として定着させたい。

Q3.

「環境」と「デザイン」の組合せは、言葉に置き換えた抽象概念の組み合わせである。「環境」は言うまでもなく現代社会の最大関心問題であり、「デザイン」は高度成長期後に拡散し、計画性があれば何にでも使われている。これは良く見れば、あらゆる現代問題に対応できるが、逆に「デザイン」行為が保持してきた「現場で生み、革新する力」を軽視化し、職分を不明確にし、結果、理念も失う。その意味で「環境デザイン」は得体の知れない分野となる心配がある。商品設計、

建築設計、まちづくりに関わった経験は結果的に、「環境デザイン」とする意味合いもある。その意味で感性を包括する用語として、社会化に努め続ける役割があると思う。



加藤三喜

Q1.

1988年東京藝術大学デザイン科学部卒業、デザイン事務所勤務後に独立。現在、株式会社KATO Design主催。

視覚コミュニケーションデザインを主軸に活動。

Q2.

この度は、EDPlace100号発行を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。初号発行以来、40年「環境デザイン」を考え編集に奔走された方々、そして引き継いでこられた皆様に感謝いたします。今回の記念企画において、現在まで積み重ねられたEDPlaceをアーカイブ化する担当を愛知県立芸大の水津先生と共に担いました。正式オープンとなりましたら、いつでも「知の共有」ができますので、ぜひ活用いただきたいと思います。

アーカイブ化の中で「環境デザイン」という領域が広大な概念であることを改めて認識しました、今後必要とされる時代のニーズに即して結合的な方法で新たなステージが生まれるのか。気になるところであります。そして今回この機会を1つの節目とし、次の世代へバトンを渡すことの大切さも噛みしめた次第です。

Q3.

グラフィック分野のデザインに携わるものとして、少しレギュラーな存在だったかもしれません。環境デザイン部会への貢献もいかほどできたか怪しいものですが、稲次先生からの学びの中で書院・数寄屋造の様式、禅宗から茶の湯への流れを含めて、建築・庭園・襖や掛け軸の総合文化であることを体感したことが始まりです。目的によって置かれる場所、見られる環境を総合的に捉える視覚系モノづくりを考える視点をもつ者として部会に参加した経緯があります。

「環境デザイン」という言葉は、地球環境も含む領域の広さを持っていますが個人的には、物事の目的や存在理由が足元でバランスよく快適に有るために必要な視点の1つであると考えます。

そして、今、広義な概念だからこそ、メンバーが共有認識できる言葉の割り当てを模索する大切さも感じています。

日々の課題や研究の発表の場という学会・部会の役割とともに部会として模索するような泥臭い時間を持つこともリモート化が進んだ今は可能ではないでしょうか。



上綱久美子

Q1.

多摩美術大学 立体デザイン科インテリアデザイン専攻卒業、東京藝術大学大学院 環境造形デザイン研究室修了、株式会社GK設計勤務、現在design office kk主宰の傍ら横浜美術大学、國學院大学講師等兼任



横浜美術大学 正門改修デザイン（通路広場部分）
横浜市都市計画のコンテキストに基づき、美術大学らしい地域に開かれた校門デザインを実現。境界のあり方を意識した既存植栽、ストリートファニチャー、照明デザインが人の動きに対する示唆ならびに余地を供与する（2024年9月完成）。

Q2.

EDplaceの編集に携わり、今回の企画でEDplaceを介した環境デザイン部会のあゆみをまとめています。改めて、部会員とその周辺の諸先生・研究者・デザイナー・学生の活動や公共・社会に対するデザインの姿勢が見てとれることに興味と強い意志を感じます。1980年代に「環境デザイン研究」の礎を築いてくださった諸先生方の知見と思いや情熱を大切に、これからわれわれが引き継いでいける具

体的なことに目を向け、ぜひとも若い世代の人たちと意見を交わせたら！と思います。環境デザイン部会のメディアであるEDplaceが、その活発な交流の場となることに期待します。

Q3.

私自身、「環境デザイン」にかかわって40年ほどです。奇しくも、環境デザイン部会発足とEDplace発刊から現在までとほぼ同じ時間です。ふりかえれば、大学生時代に「関係性」について疑問を抱いて、当時の先輩や恩師の教えに助けられ進学した稲次敏郎先生の研究室が私の環境デザインの出発点でした。その時の研究やプロジェクト、環境デザインに携わる先生方や同朋との出会いが現在の自分を形成しています。環境デザインの領域で活躍できることに心より感謝するとともに、継続してきていることに誇りを感じます。環境デザインとの出会いはセレンディビティによる私自身の環境デザインとも言える、幸せで楽しい、やりがいを感じる職能です。



川合康央

Q1.

2002年京都工芸繊維大学大学院博士後期課程修了。博士(学術)。同年より文教大学情報学部情報システム学科講師。青山学院大学、相模女子大学、明治大学兼任講師。現在、文教大学副学長、情報学部長、教授。

Q2.

環境デザイン部会に参加し、過去のEDplaceのテキストマイニング分析に携わりました。この分析から、環境デザインが、空間、建築、都市、プロダクト、グラフィックなど、多様な分野を横断する領域であることが分かりました。都市や建築の設計・計画といったハードウェアから、市民参加のまちづくりなどのソフトウェアまで、人間とその周囲を取り巻く環境とのより良い関係を築くことを目指すこの領域は、さまざまな分野の知見を融合することで、今後の社会においてさらに重要になると考えられます。

Q3.

学生時代は、建築設計(CAD)と都市計画(景観デザイン)を中心に研究していましたが、現所属に着任後は情報学を専門としています。その中で、都市の情報化をテーマに、現在は都市のデジタルツイン開発に取り組んでいます。デジタルツインは、物理世界を仮想空間上に再現し、シミュレーションやビジュアライゼーションを行う技術です。これにより、災害時のリスク分析や人々の動線変化などの可視化・分析が可能になります。環境デザインに情報学を組み合わせることで、より快適で安全な現実世界をデザインしていくことを目指しています。



小泉雅子

Q1.

多摩美術大学デザイン科グラフィックデザイン専攻卒業、筑波大学大学院修士課程芸術研究科修了、京都芸術短期大学専任講師等を経て、現在多摩美術大学グラフィックデザイン学科教授。

Q2.

大学院進学当時、筑波大学の西川潔先生に勧められてデザイン学会と環境デザイン部会に入会しました。就職後の京都在任時はEDplaceが部会活動を知る術でした。その後、長谷高史先生の(当時の)若手招集で20号から編集委員に加えていただき、レイアウトしながら原稿を読むのを楽しみに続けてきました。門外漢ですがEDplaceから、部会員のみなさんの研究や時期毎の課題、問題意識を知り触発されています。部会も高齢化が進んでいますので後進を誘いつつ、みなさんと年齢を重ねながら、様々な専門性、年代、各地の方が共にやりとりできる、フラットな場として進化しながら続いていくことを期待しています。

Q3.

私の専門はビジュアルコミュニケーションデザイン、サイン計画、環境グラフィックスです。そのため、情報と環境の関わりは常に関心事です。今日のデザインは横断的、統合的になり、領域の垣根は低

くなっています。そのような中で、環境デザインの領域は当初から、それを先取りしていた人間の生活を繋ぐものであったと思います。環境デザインは、私にとってそういう広がりや繋がりを確認しながら考える場です。



菅原香織

Q1.

1989年秋田市立美術工芸専門学校講師、1995年秋田公立美術工芸短期大学産業デザイン学科助手・2007年公共デザイン分野助教、2013年秋田公立美術大学景観デザイン専攻助教・2017年准教授、2022年～現在まで美術教育センター准教授

Q2.

環境デザイン部会には2022年に入部してEDplace94号の卒制特集号に巻頭言を投稿して以来、景観デザイン専攻の学生の卒制作品を掲載していただき、学生にとって大きな励みになりました。新たに卒業研究に取り組む在学生や指導教員にとっても、他大学の卒制を知る良い機会になっているので、これからもぜひ継続していただきたいコンテンツです。また100号記念事業のEDplaceバックナンバーWEBアーカイブ化により、これからの環境デザインの教育・研究の貴重な歴史資料として、多くの研究者、教員、学生の皆さんに活用されることを期待しております。

Q3.

1995年に環境デザインコースの助手として着任した当時はプロダクト、クラフト、インテリア、住宅、まちなみなどをデザインすることが環境デザインと考えていました。その後、土地の気候風土に育まれた生産物や伝統の技を活かした環境デザインを研究する間に妊娠・出産・子育て・介護を体験してからは「妊産婦、乳幼児、子どもから高齢者、障害者、外国人など、そこに暮らす誰もが享受することができる公共の福祉に資するデザイン」が私にとっての環境デザインとなりました。現在は、学生がさまざまな地域プロジェクトの現場に赴き「傾聴・観

察・協働・実体験」を通して地域のデザインを提案・制作する美術教育も環境デザインと考えています。



地域プロジェクト演習・紙風船上げまつり
毎年2月10日に秋田県仙北市上楡木内地区の小正月行事として開催される「紙風船上げ祭り」の絵師不足問題に協力するプロジェクト。2名の学生がデザインし描いた紙風船を、保存会の方々が組み立て、大学の広場で試し上げをしてくれた。

田崎冬樹

Q1.

1999年東京藝術大学大学院修士課程デザイン専攻修了（描画装飾研究室）。平面造形作家として1998年よりグループ展、個展多数。2000年～2002年東藝術大学非常勤講師。2010年～横浜美術大学美術学部准教授。

Q2.

現職で学内のサインシステムに携わる機会をきっかけに入会させていただきました。コロナ禍での入会でしたのでそれ以前の様子を窺い知ることはできませんが、オンライン上での活発な意見交換の場は自分にとって大きな学びの場でありました。EDplaceでは巻頭言にも寄稿させていただきましたが特に卒業制作特集や研究ノートへの寄稿は選出した学生にとっても大変有意義なものでした。自分の研究分野であるグラフィックデザインにおいても環境デザインのカテゴリーに非常に近い考え方の作品も近年増えてきていると感じています。今後ともボーダレスな研究分野としてさらに発展していくのではないかと期待しております。

Q3.

平面作品を作り続けている自分にとっ

てあまりにも畑違いかなと思っていましたが、絵画も展示をするようになった途端に環境が絡んできます。家に絵を飾るにしても、どの部屋にどの向きでどの高さで、というのは空間を意識しなければなりません。例えば日本家屋では古くより床間の様式があり掛け軸を飾る風習があります。季節や節句、仏事で掛け替えることができるので伝統的な屋内環境の一端を担っていると捉えることができるのではないのでしょうか。“環境デザイン”という分野が非常に多岐にわたり間口の広い学問であることをキャンパスサインを通して知ることができました。

土田義郎

Q1.

建築環境工学、特にサウンドスケープを専門としています。生活の中に根付く音への感性を保全し、広げることをライフワークとして取り組んでいます。現職は金沢工業大学建築学科教授。

Q2.

建築学（特に環境音）を専攻とする私が主に活動していた学会は、建築学会や音響学会、サウンドスケープ協会という環境と音にかかわる学会でした。デザイン学会に入会したのは1997年ですが、他の製品デザインや視覚デザイン系の方との接点で自分自身になかったためあまりアクティブな会員ではなかったといえます。環境デザインという概念の中には視覚以外の感覚も当然あり得るわけですが、音関係の会員が少ないという現状があります。他学会との連携があれば、他の建築系や音響系の方の参加も見込め、延いては学会の活動の活性化も見込めるのではないかと考えています。

Q3.

環境デザインという語における環境という語の表すものは、人間を主体として考えた環境ということになるでしょう。地球温暖化も人間同士の軋轢もすべてのものが環境という語に集約されてしまうような時代ですが、ことデザインという分野においては直接的に人間を取り囲む

もので、人間の知覚によって認識され、心理的に構築される物理的な世界ということができると思います。直接的に人間の快適性や利便性を向上させるためのすべての技術や創造が環境デザインであると考えます。



風鈴づくりのワークショップの実施

橋田規子

Q1.

東京芸術大学デザイン科卒業後、TOTO株式会社に入社、水廻りのデザインに携わる。2009年より芝浦工業大学デザイン工学科教授。2020年「エモーショナルデザインの実践」出版。主に、生活用品や家具などのデザインを実施。

Q2.

環境デザイン部会の活動で印象強かったことは、2011年に発生した東日本大震災の災害現場の見学会である。実際に現場に行き行って衝撃を受けた。その場所を歩くことで画像や動画の何倍もわかることがある。環境デザイン部会の見学会は、異なる専門分野を持つ会員が、環境デザインはどうあるべきかを、部会員同士が会話することで繋がりが生まれると感じた。他には、2022年のデザイン学会春季大会のエクスカージョンも印象に残る体験であり、芝浦校舎の船着き場から屋形船を貸切って、運河から沿岸の自然環境を見学した。また、これらを紹介する媒体としてEDplaceは効果的であるので、引き続き継続し、環境部会の存在を部会外へPRしていけたらと考える。

Q3.

私はプロダクトデザイナーとして数々の製品をデザインしてきた。従来は製品

の機能性や美しさがデザインの良さの中心であったが、最近では、それはどのような背景から生まれたものなのか、や、人の生活の中でどのような存在になりえるかという、時間的、空間的な視点が重要視されてきている。さらに、製品作りが自然環境に悪影響を与えている現状が浮き彫りになり、作り方や作る素材にも配慮する必要が出てきた。そういう意味では、プロダクトデザインは環境デザインの一部であると言ってよいのではないかと考える。これからは、未来の人々への影響を考えてデザインするという事が必要なのだと考える。



PAGES_CHAIR 環境デザインを意識した椅子
 ・座シートをめくると素材や色が変わり、空間に変化が起きて楽しめる。
 ・ユーザーが自分で好きな布をセットできる。作ることによる楽しさ、心の充実感。
 ・思い出の布を使う事で、自分だけのストーリーのある椅子が出来上がる。
 ・布の廃棄問題に寄与できる。
 ・木と布を使った自然に優しい素材構成。

伏見清香

Q1.

株式会社乃村工藝社で事務とディスプレイデザインに従事、名古屋大学で博士号取得後、名古屋市他で都市景観に関わるアドバイザー、審議会委員を歴任、各大学教育活動を経て現在、放送大学大学院文化科学研究科教授

Q2.

環境デザイン部会40周年記念展覧会に向け、年表班に参加させて頂き、過去のEDplaceを繰り返し読み直していますが、私自身、その深さと厚みに圧倒されています。長年に渡りEDplaceに投稿してきた方々の文面からは、客観性を維持しながら、その反面、対象に対する真摯な眼差しと厚い思いが伝わってきます。さらに、

俯瞰し、EDplace全体を眺めると、社会と環境デザインのつながりや、社会と共に変化してきた環境デザインの変遷も見えてきます。その変遷をまとめ、整理していくことは、重要であると感じています。

Q3.

社会の変化と共に、環境デザインも変化し、領域は日々広がりつつあると感じています。環境デザインは、デザインの分野の中でも、特に領域の広い分野ではないでしょうか。環境デザイン部会の方々の専門分野が様々である様に、私自身、平面、空間、情報の各分野で学び、ディスプレイ、建築、景観、情報、教育に関わる分野で活動してきました。研究では、社会において、物と人、空間と人、情報と人、人と人をつなぐために、どの様に「環境」を「デザイン」するか？が、リサーチエスジョンであり、現在の私にとっての環境デザインということができるのではないかと考えています。



Co muse System
 web上のミュージアム連携観察鑑賞支援システム
 Cooperative Museum Evolution System
<http://comusesystem.com>

森山貴之

Q1.

企業にてパブリックアートのコミッションワークに従事後、2003年に京都市立芸術大学大学院博士後期課程修了、2010年から2013年まで同大学ギャラリー学芸員、2014年より横浜美術大学教養科目准教授

です。

Q2.

私は2010年代に部会に参加したもので、それ以前の活動はEDplaceのバックナンバーを通じて知るしかないので、少なくとも1980年代以降の国内を中心とした環境デザインの研究実践を学ぶうえで大きな価値をもつと考えます。と同時に、それらの知見をどう次代へとつないでゆかの道筋をつけることが、現在の部会に問われている課題であると思います。特に部会の社会貢献のありようについて、現在進めているWEBアーカイブ構築や展覧会企画、あるいは見学会活動と並行して、個人的にはもっと一般の方や学生に開かれたやわらかい企画やメディア発信などができればいいなあと思います。

Q3.

もともと私の場合「環境デザイン」とはかなり美術よりで、造形物による修景的なものあるいはアートプロジェクトによるコミュニティの仮設など、その場にある要素をキュレーションし意味や価値を生み出す手法として理解していました。ただ、むしろその手法がもつある種の強引さというか一義的なあり方について考えてきた面が大きく、今は美術デザインの諸領域において誰もが実践することができ、それが専門領域にとっての批評的行為となるような、「パブリック」な創造のありかたを考察しています。考察対象は雑多ですが、それぞれの対象領域のパブリックネスを導くことが、今の私にとっての環境デザインだといえます。

山下航

Q1.

1979年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。15年TIS公募入選。書籍や雑誌、パンフレット、Web、パッケージ等でイラストレーションを描いています。横浜美術大学助教。東京イラストレーションズソサエティ会員。

Q2.

環境デザイン部会に参加して2年ほど経

ちますが、まだ部会の活動内容や方向性を十分に理解できていない部分もあります。それを踏まえ、これからの部会に期待することは、まず実践的な学びの場としての充実です。具体的なプロジェクトやワークショップを通じて、空間デザインの社会的影響や持続可能性に関する深い理解を得られる機会を増やしてほしいと考えています。また、他の専門分野との連携を強化し、より多角的な視点から環境デザインを学べるような環境が整うことを期待しています。さらに、部会内での情報共有や意見交換が活発になり、メンバー同士が互いに刺激を受け、成長できる場が広がることを願っています。

Q3.

私にとって環境デザインとは、物理的な空間を作るだけでなく、そこで過ごす人々の感覚や体験を意識し、生活の質を向上させることです。視覚、触覚、聴覚などの感覚全体を考慮し、空間が与える心理的影響を重視します。これまでグラフィックデザインやイラストレーションを通じて二次元的な思考をしてきましたが、環境デザインに携わる中で、空間が人々の行動や感情に与える力を実感しました。学内のサイン計画や正門リニューアルを通じて、空間を通じた情報伝達やアイデンティティの表現、快適さの重要性を認識しました。環境デザインは、視覚的な美しさだけでなく、機能的や感覚的心地よさ、社会的・文化的背景を織り交ぜた総合的なアプローチが必要だと感じています。



横浜美術大学 正門設計 完成予想図

山野雅之

Q1.

1988年3月：東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程学位取得（学術博士）
2021年3月迄：女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域教授

現在：女子美術大学名誉教授

Q2.

人間の知的活動の中に人工知能（Artificial Intelligence）が大きな役割を持って入り込んできている社会状況の中で、人にしかできない創造性とは何かを考えながら、人間らしい感性を育む環境づくり、感性を豊かに保つ環境づくりを追求していくことが、今まで以上に求められる大切なものとなっていくと考えています。

不安定な世界情勢にあって、精神的なストレスを多くの国民が抱える現状が、社会問題として浮かび上がってきている現代において、快適性、居心地の良さ、安らぎを演出する環境づくりは、今後重要な役割を果たすと思います。

環境デザイン部会が、そうした課題を担って研究を推し進め、大きな成果を挙げていくことを期待しています。

Q3.

医療環境（病院）のアメニティーを高めるためのアート&デザインをテーマとして、環境デザインの視点から研究をしています。

1992年度から現在までヒーリングアート（癒しの芸術）による医療・福祉施設内における利用者の精神的ケアを目的とした環境改善の取組みを継続的に実施し、社会に向けて情報を発信しています。首都圏を中心に国公立病院、大学病院など約40箇所の病院や介護老人保健施設でのアートプロデュースとヒーリングアート作品設置のトータルコーディネイト、および学生による共同制作の作品指導を大学教育の中で行ってきました。現在も、医療現場でのヒーリングアートの設置活動を持続可能にする為の環境デザイン研究を続けています。

山本早里

Q1.

1992年東京理科大学建築学科中途退学、1997年東京工業大学社会学システム専攻修了、博士（工学）学位取得、鎌倉女子大学講師を経て、現在筑波大学芸術系教授。2005年英国ブライトン大学客員研究員。

Q2.

デザイン学会のいくつかの部会の中で空間・建築・環境に係る部会として常に活発な活動をされてきた諸先輩方には頭が下がる思いです。これからも引き続きこの分野の研究・方向を示す活動をしていかれればと思います。その時期のタイムリーな話題に対し問題意識を常に持つことと、その先の課題にも思いをはせる眼を養っていくような活動ができればよいと思います。自分自身が雑務に追われ活動が十分にできていないのでいつも申し訳ないと思っています。

Q3.

心を豊かにし、弱者によりそうデザイン。新しい視点に気づかせるデザイン。



EDplace

2. モノ・コトから考える

EDplace100号企画コンテンツであるEDplace年表、EDplace掲出テキストマイニング、EDplaceデジタルアーカイブの各担当者より、進捗や思いを述べてもらった。

2-1. 年表 EDplace100号までの歩み 小泉雅子 (多摩美術大学)

EDplace誌は1985年に第1号を発行し2025年に100号を迎えます。数年前に編集委員の間で100号記念の企画の検討が始まった時に、私個人としても関心が高く変遷を辿りながら作ってみたいと考えたのが年表でした。現在、制作中の年表「EDplace100号までのあゆみ (仮称)」は、上綱久美子氏、佐々木美貴氏、伏見清香氏と一緒に担当しています。年表に繋がる前段の作業としては、2023年度春季大会のOpenSIG「卒制を解く！ EDplace卒業制作特集から」の準備のために全号のリストと概要の一覧表をまとめました。2024年度春季大会期間には対面とオンラインで部会員の意見交換ミーティングを行いました。また、水津功氏、加藤三喜氏担当のEDplaceデジタルアーカイブ(p.21参照)では全号の目次を作成しました。デジタルアーカイブは年表作成作業にも活用しています。

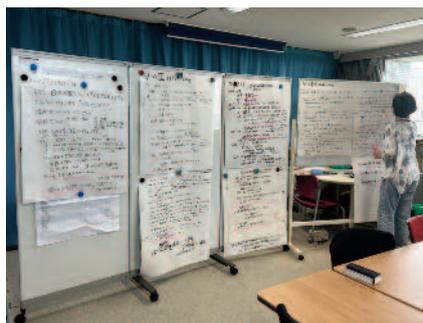
具体的な年表作成の作業は、まず、すべての号を担当全員が読むことから始まりました。次に40年間を10年ずつ、チーム1 (1985-94)、チーム2 (1995-2004)、チーム3 (2005-2014)、チーム4 (2015-2024)の4つのチームに分けました。担当4名で

分担してさらに読み込み作業を行い、各チームの要旨や時代感を確認しました。各チームの動向を把握したうえで、部会が担当した学会特集号やオーガナイズドセッション、部会の見学会や研究会などの活動を抽出し、各時代のキーワード出しを段階的に行いました。チーム1 (1985-94) は部会の黎明期で、筑波国際科学技術博覧会が開催された1985年に第1号発行、どのように環境デザインを捉えるか座標の模索の時期。チーム2 (1995-2004) は1995年阪神淡路大震災から生活環境の安全性、住民参加、リアルとバーチャルなど、価値観の転換が見られる時期。チーム3 (2005-2014) では、景観法施行、保存と再生、2011年東日本大震災に直面しての課題、震災遺構。チーム4 (2015-2024) では、震災復興、東京オリンピック、人口縮小社会、持続可能性、Covid-19、循環などのワードが経過で挙がっています。また、環境デザイン部会の人々の関係の整理も試んでいます。最終的に、EDplace発行から40年間のキーワードとして、100個を選ぶこととし、候補を挙げて意見交換をしながら絞り込み、各チーム25ずつのワードに精査する作業を継続中です。

年表作成と並行して、川合康央氏が前

述のOpenSIG卒制特集に引き続き、テキストマイニングを担当し、EDplace誌の出現頻度での言葉の傾向の分類が進めています (p.20参照)。年表のキーワードは内容を読み込みマンパワーにより選んだものですので、人間とコンピュータのそれぞれが選んだワードの比較も行っています。

この年表は、11月に予定している展覧会 (p.22参照) で展示予定です。年表への掲載項目のデザイン学会春季・秋季大会の開催記録についてはデザイン学会事務局の協力を得ました。また、関係深い年表として「日本デザイン学会50年史年表」「デザイン学会60年史」、長谷高史先生の「環境デザインの系譜」を参考にしています。長谷高史先生は年表作成の要所で参加してくださり、貴重なお話をうかがいながら進めることができました。100号企画では部会の黎明期の様子や設立当時の経緯から現在までの変遷に注目していますが、当時のお話を聞ける方はとても限られており、関係者の力を合わせての貴重な資料のまとめになると考えます。本年表が環境デザイン部会活動の振り返りと環境デザインの将来を考える一助になればと願っています。



伏見先生のご協力により放送大学にて年表作成合宿を行った (左段8月, 右段12月)

2-2. EDplaceのテキストマイニング分析 川合康央 (文教大学)

テキストマイニングは、大量の文章データから有用な情報やパターンを抽出・分析する手法です。この手法により、人間が精読するには困難な膨大な文書を効率的に分析することが可能となります。今回の分析では、EDplaceのデジタルアーカイブ化に伴い、第1号から第99号までのテキストデータ（約190万語）を対象としました。まず、形態素解析を行い、34,556種類の単語を抽出しました。次に、EDplaceの文章を10年ごとにテキストファイルとして準備しました。これらを日本語形態素解析システムMeCabで形態素解析を行い、前処理を実施しました。その後、KHCoderで抽出語リストと文章×抽出語の対応表をCSV形式でエクスポートし、行列変換やエンコードなどの処理をPythonで行いました。

単語頻度 (TF, Term Frequency) を計算する際、単語の出現回数を全単語数で割ることで、期間ごとのテキスト数に関

わらず頻度を比較しました。分析の結果、一般的な語（例：「する」「ある」「よう」など）が多く含まれたため、品詞を名詞に限定して再分析を行いました。さらに「こと」「もの」「ため」などの一般語や、本テキスト特有の頻出語（例：「環境」「デザイン」「学会」など）を除外しました。次に、抽出された語をわかりやすく可視化するため、出現頻度に応じて単語サイズを変更したワードクラウドを作成します。また、逆文書頻度 (IDF, Inverse Document Frequency) を用い、一般的な単語は青色、特徴的な単語は赤色で表示しました。

ワードクラウド画像の特徴と差異を分析すると、時期ごとの特徴的なキーワードやテーマが反映されていることが分かります。最初の期間（1985～1994年）（図1）では、「都市」「建築」「計画」「設計」など、都市や建築に関する基本的なテーマが中心となっています。この時期は部会立ち上げの初期段階にあり、「問題」や「観点」など、基礎的な概念や抽象的なテーマが多く見られるのが特徴です。

次の期間（1995～2004年）（図2）では、「活動」「文化」「参加」「地域」といった社会的・文化的なキーワードが目立ちます。この時期には具体的なテーマへと移行し、地域活動や市民参加が注目されていることが伺えます。続く期間（2005～2014年）（図3）では、「災害」「避難」「防災」など、自然災害や危機管理に関するキーワードが顕著に増加しています。特に東日本大震災の影響を受け、防災が大きなテーマとなって議論されていたことが分かります。最後の期間（2015～2024年）（図4）では、「展示」「発表」「芸術」「美術」など、文化や芸術に関連するキーワードが目立っています。この時期には建築や都市だけでなく、文化的価値や芸術表現が重視され、環境デザイン部会が幅広い視点で活動を展開していることが読み取れます。

今後、ワードクラウドを活用して特徴的な単語の分析を進めるとともに、地名や人名との関連性など、さらに分析を進めていくこととします。



図1：1985～1994年



図3：2005～2014年



図2：1995～2004年



図4：2015～2024年

2-3. EDplaceアーカイブについて 水津功 (愛知県立芸術大学)

美学者の岩山三郎 (1920-1996) は、古代から現代に至る美術史には解体化に向かう時代と、総合化に向かう時代があり、これらが交互に現れる構造があると考えた。解体化とは細分化や専門家が進み抽象化を加速させる欲求であり、総合化とは相互作用から生じるバロック的效果に関心を寄せる欲求であり、人が美術に求める期待の双極性を往復する振幅運動に注目したのだ。この法則がもし近代のデザイン史にも当てはまるのであるなら、より総合的でゼネラルな視点の重要性を主張する環境デザインは、一旦解体へ向かったデザインの関心を反対の総合化の視点へ引き戻そうとするベクトルとして解釈できるのではないのか。

機関紙EDplace第1号が1985年に発行されてちょうど40年が経過した。「環境デザイン」と言うコンセプトは、歴史的視点を持って俯瞰するのに十分な時間が経過したといえる。前述した解釈は一つの可能性であるが、今後はより多くの研究者が「環境デザインとは何か」について論じる事になるであろう。当初発行100号を

記念した出版物の企画を行っていた担当者らの議論は、EDplaceのコンテンツを広く公開し、より多様な解釈や仮説、論考が生まれる機会を提供することが、今、我々がすべきことではないかとなった。環境デザイン部会活動の40年を概観できるようにし、「環境デザイン」という視点、あるいは問題提起が何であったのか、どのように始まり、共有され、議論されてきたのか、その歴史的意味は何かを考察する1次資料として、余計な編集を加えず、できるだけフラットにオープンソース化することを目指そうとなったのである。かくして出版企画担当はアーカイブ制作担当となった。

本アーカイブの仕様に、特に目を引くような新しい技術や特徴は無い。検索条件を入力し、検索結果から該当するpdfデータを閲覧、ダウンロードできる。検索方法は、発行年 (1985年以降)、号番号、著者名、キーワード検索は目次あるいは全文を対象にできる。全文検索結果は該当ワードがマークされた「頁」が表示され、それ以外の検索では該当する「号」が提示される。極めてシンプルな構造である。

ただ、アーカイブを構築する道のりは

決して平坦ではなかった。まず、綺麗な初期の発行号を集めることに難航し、長谷高史先生にご尽力いただいた。また、1号~19号はデータが無く紙原文のOCR処理 (テキスト変換) で生じる誤変換の修正作業が発生した。20号以降はデジタルデータが保存されていたが、システム環境の違いから生じるレイアウトの乱れや文字化け等の発生を抑制・修正を行う必要が生じ、小泉雅子先生に多大なご負担をお掛けした。この他、公開に相応しくない個人情報のマスキング処理を行う為の修正箇所の抽出に複数の部会員の協力が必要であった。誰もが見やすいと感じるインターフェイス設計においては加藤三喜さんが協力して下さった。

今後新たなEDplaceもこのアーカイブ上で公開するので、部会員による定期的な情報更新ができるようにした。ゆくゆくはデザイン学会内での限定公開を経て、広く一般公開することを目指している。

日本デザイン学会環境デザイン部会機関誌EDplaceアーカイブ

<https://edplace.jp/login>

The screenshot shows the EDplace archive interface. On the left, there are search filters for '発行年' (Year) set to 1985-1988, '号番号' (Issue Number), '目次' (Table of Contents), '著者' (Author), and 'キーワード' (Keywords). The main area displays a list of issues with columns for '年' (Year), '号' (Issue), '目次' (Table of Contents), '著者' (Author), and 'PDF' (Download). The list includes issues from 1985 to 1987, with detailed titles and authors for each.

年	号	目次	著者	PDF
1985年	第1号	「点と面」環境デザイン学会の建築について 環境デザイン学会の初巻 今後の研究活動に当たって 第2回研究報告会報告 自然景観の環境的価値の環境アセスメント方法確立の試みの研究 環境デザインと意識 第1回研究報告会内容 国際科学技術博覧会 科学博覧会の情報伝達システムに関する調査、研究	宇次敏郎,井上尚夫,柳 藤貴夫,黒谷洋一,鈴木 弘,志賀健治,小泉 雅子,富田誠夫,西岡徳 之	
1986年	第2号	まさき 多岐の集約化が求められる環境デザイン ED学会のおおらぎ (池田学芸大学高等専門学校) クリストファー・アレグザンダーについてのメモ 第2回研究報告会内容 環境アセスメントにおける評価構造の研究 第2回研究報告会内容 環境デザインに関する異文化考察 事務局により	西沢健,井上尚夫,西田 昌嗣,黒谷洋一,黒澤敏 夫,鈴木健,井上	
1986年	第3号	環境デザインのもう一つの視点「文字における環境」から 第1回建築設計協議委員会年報 《金澤学国語学系》 異字論記 池田学芸大学高等専門学校を見て 池田学芸大学高等専門学校を見て—クリストファー・アレグザンダーの理論と実践について— 池田学芸大学高等専門学校を見て 事務局により 新入部会員の紹介	井上尚夫,黒田研祐,栗 川,白沢力,木村信彦	
1986年	第4号	神の投票 昭和63年度春大会に向けての部会委員会議事録 第3回研究報告会内容 中興・富田学芸大学 地方に於ける環境デザインの現状—岡山—地方自治体の事業と環境デザイナー 名古屋造形芸術短期大学のキャンパス設計ノートから ED学会の冒険へ 事務局により 第4回研究報告会会場案内	黒川誠人,黒沢敏夫,水 野雅生,田村俊明,黒川 敏久,林真正	
1987年	号外	号外 昭和63年度ED学会主催 春大会に向けての特集 第4回研究報告会 日本デザイン学会昭和61・62年度総務および担当理事 昭和63年度春大会のための第一回専ら委員会議事録	内藤智子	
1987年	第5号	ED place No.5 表紙 第3回研究報告会内容 環境地形デザイン—視点と比較環境地形論に向けて— 環境デザインの向上を目指して— Better and Total Environment Designing メトロポリタン・トロント・レファレンス図書館のサイン— Signage System in Metropolitan Toronto Reference Library— 意識と知覚心理・Landscape and Perceptual Psychology— 江戸川区公共サインについて 環境デザイン・Urban Info-Media表	井上尚夫,鈴木誠,西川 康,黒澤敏夫,長谷高史, 黒田昌嗣,黒田研祐,西 沢健	

EDplaceアーカイブ 仕上がり画面

3. バで考える

3-1. 展覧会の経緯と主旨

森山貴之（横浜美術大学・環境デザイン部会 主査）

2025年11月15日-23日に東京表参道のTIERS GALLERYにて、EDplace100号発行記念企画展覧会「EDplace 100th memorial：環境デザインのこれまでとこれからについて考える（仮称）」の開催を予定しております。1985年に創刊しまもなく100号を迎えるEDplaceのあゆみから、約40年にわたる環境デザインおよび研究活動を俯瞰し、次代に継承すべき課題について考える展覧会です。

コロナ禍の2021年度秋季発表大会にて、オーガナイズドセッション「環境デザイン（小）会議～マッピングを通して見えてきた環境デザイン部会の世界～」を催しました。そこでは部会員の研究紹介をもとに、領域横断的な環境デザインを俯瞰するキーワードマッピングを作成し、その中心領域や今日の課題を見出すことを試みました。続く2022年度春季大会ではオーガナイズドセッション「変化“せられる”デザイン～環境デザイン編～」と題し、建築のデジタルアーカイブに携わられている砂山太一さんをゲストに、我々が取り扱う「環境」の今日性についてディスカッションを行いました。これらの試みのなかで、あらためて当部会の設立主旨にある「ヒト・モノ・場・自然の関わり合いに関するデザイン研究」としての意義を再確認するとともに、これまでの部会活動を総覧し過去から未来へとつなぐアーカイブの重要性を共有しました。

こうした活動を引き継ぐかたちで2024年度は年間活動テーマとして「つなぐためのアーカイブ：EDplace40年のあゆみにみる環境デザインの総括と未来」と題し、これまでのEDplaceを読み解きながら、そこから導かれる将来についての提言を行うことを目指しています。部会の機関紙であるEDplaceの100号までの歩みには、40年間の環境デザインの変遷と部会の知見が凝縮されています。この機関紙をデジタルアーカイブ化することによ

り、それまで部会内で共有してきた環境デザインの「知」は、さらに広く活用されるのが期待できます。そこでEDplace100号発行を記念して、EDplaceバックナンバーのWEBアーカイブ化とその周知を目的とした本展覧会の企画へと至りました。

この展覧会では部会員の「想い」が一つの価値をもつと考えております。その想いとは、EDplaceのアーカイブを手がかりとして、こんにち環境デザインに携わっている我々がどう過去（とりわけ震災などを経た我々にとっては、過去に対する経験や記憶、感情も含まれると思います）を将来の実践につなげることができるとかという想いです。そうした「知」に付随する「想い」を展示のなかで見せてゆくことはアーカイブ自体が発するメッセージになると同時に、来場者にとっても自身の環境にたいする体験や記憶を呼び起こすきっかけになると考えます。学術研究成果公開としてのレベルを担保しつつ、開かれたアーカイブ展示として読みの多様さを導き、活発な議論を呼ぶものにしたと考えております。

3-2. EDplace100号発行記念企画展覧会「EDplace環境デザインのこれまでとこれからについて考える（仮称）」の展示企画の概要

上綱久美子（design office kk・EDplace会報委員）

1. 発端

本展覧会「EDplace 100th memorial：環境デザインのこれまでとこれからについて考える（仮称）」は、環境デザイン部会の機関誌EDplaceが100号を迎えるにあたり数年前から会報委員が記念企画をしようと提案したことが発端です。初号発行から100号までの40年という時間をEDplaceの掲載内容を通して環境デザイン部会がこれまで何をしてきてどこに向かおうとするのかを見渡し考える良い機会であるため、EDplaceを通じた環境デザイン部会の年表を作成することになりました。部会全体に呼びかけ「EDplace100

号記念企画メンバー」を募り、2023年末よりオンライン企画定例会を月1回行っています。

2. アーカイブ

それと並行して、これまで紙媒体、電子媒体で発行してきたEDplaceを全て閲覧できるWebアーカイブを実現し、環境デザイン部会員だけでなく広く一般に公開を目指し、「環境デザイン」の理解と環境デザイン部会の研究活動への興味の対象領域を広めることを展望します。

3. 展覧会内容

展覧会は、2025年11月15日（土）～11月23日（日）、東京都渋谷区の表参道にあるティアーズギャラリー（入場無料）で開催します。環境デザイン部会としては、初めての展覧会ではないでしょうか。展示内容の概要は、EDplaceを通して環境デザイン部会のあゆみがわかる年表とEDplaceのWebアーカイブ体験コーナー、EDplace100号までの掲載テキスト分析結果（テキストマイニング）、部会員のインタビュー動画、環境デザイン部会編集の日本デザイン学会特集号および関連書籍・模型展示などです。

併せて、展覧会期間中の夕方～閉館までの時間に「ギャラリートーク」として、年表を通して環境デザインの過去と未来を現在を起点に部会員と参加者らで意見交換する場、環境デザインのアーカイブについてゲスト講師を呼んで部会員と参加者とインタラクティブに意見交換できる場など、ライブで幅広くディスカッションできる時間と場を設ける企画などを検討中です。

4. おわりに

40年前から環境デザインの定義や意味を学術的に探究・確立させるためにご尽された環境デザイン部会の先生方からのお言葉や環境デザイン部会の活動成果などを後世へ引き継ぐべく、これまでとこれからの結節点としてのEDplace100号と展覧会になることを願っています。

部会員の皆様には、展覧会に向けてご理解ご協力を心よりお願い申し上げます。

特別寄稿

日本デザイン学会環境デザインED部会報
100号記念

太田幸夫（太田幸夫デザインアソシエー
ツ代表）

EDplace100号の発行にあたり、太田幸夫先生の実績とED部会への想いの原稿をいただきました。編集担当で相談し、全文をここに記載させて頂きました。さまざまな関わりがED部会の中でありましたことみなさまにご報告させて頂きます。（佐々木美貴）

太田幸夫が日本デザイン学会に入会したのは確か1967年、推薦者は勝見勝先生で会員番号は60番台だったと記憶している。先生との初対面は1966年、旧ユーゴスラビアのブレッドで開催されたICOGRADA（国際グラフィックデザイン団体協議会）の国際会議の会場だった。

多摩美術大学大学院美術研究科を修了後、資生堂のデザインを確立した山名文夫先生から推薦状をいただきイタリア・ベニス国立美術学院に留学していた太田は、ICOGRADA国際会議の開催テーマが「サイン・シンボル」なので出席しなければと薦められて、会長や実行委員長だったピー・ターニーボンやデ・マージョ、F.H.Kヘンリオンなどに個人的手紙を書いて、事前に参加の了解を得て出席した。

総会の審議ではいきなり、「日本の団体会員である日宣美（日本宣伝美術協会）の事務局機能が停滞して連絡が取れない。」という緊急議題が20～30分間審議された結果、除名処分になってしまった、とても驚いた。日宣美展の入賞者は毎年、日本のグラフィックデザイン界のエリートとしてとても高く評価されてきた事実を太田は知っていたからだ。日本の事務局が国内のことで手一杯で、結局団体会員としての責任を果たせなかったことは、よくわかる。

その日本の団体会員除名の後、日本からの出席者は太田一人の10数年が続いた。その後、亀倉雄策さんがJAGDAを立ち上げられ、ICOGRADAを支える立派な貢献

をしてきた歴史が作られた。

亀倉さんはスキーのプレイヤーとして有名だった。北海道で日本初の山岳スキー場のサイン計画を、スキーの経験がない太田がデザインしたことがある。片足が少し不自由な自衛隊スキー隊長に同行してもらった時、山頂で二人が腰をおろし、見晴らしいっぱいの山脈を指差して、どのようにスキーコースができるのかを、説明いただいた。そして、最初のこの場所に戻るまでに一週間かかる日本初の山岳スキー場だと教えられた。

太田のデザインが仕上がった時、亀倉さんだけからはコメントがほしいと思い、東京の事務所を訪れた。「よくやっていると思うよ。」という一言の後、「このスライドを全部貸してほしい」と言われたので、結構です、と言って置いてきた。面談の途中、電話が入ってその通話が終わった時、「今だれと話しかわかる？」と聞かれた。わからないと言ったらそれは天皇家のお髭の殿下で、フランスにいつも一緒するとのこと。そしてフランスの大きな地図を出して、日本にはまだできていない山岳スキー場を説明してくれた、その後、数ヶ月して亀倉さんがサインデザインを担当された安比高原スキー場が完成した。

勝見先生はユーゴ会議の2年前の1964年、東京オリンピックでのピクトグラム制作の経緯と成果についての報告と、世界600の大学から集めた学生のピクトグラムデザインの作品講評と審査協力のためにICOGRADAに招聘されていた。日本が除名された後も勝見先生は、国際通信メンバーとして協力されていた。太田は3年ごとの会議になるべく出席してLoCoSも発表し、A4版の会報に何ページも使って紹介をされたこともあった。特にピクトグラム（サイン・シンボル計画）に関しては、実行委員長のP.ニーボンはじめ役員が熱心であったが、ある時、受付に集まった会長はじめ役員が顔が苦渋に歪ん

でいる。理由を聞いたところ、オーストラリアのC.K.プリスから「私が永年苦勞して研究開発してきた視覚言語の国際会議を、一言も私の了解を得ないで開催するとはけしからん」という抗議を受けとって困っているとのこと。

太田はC.K.プリスのプリスシンボルのチラシを見て、全ての単語の形を作るのに、100種類の単語を2～3種類組み合わせさせて造語していることに無理があると思った。たとえば矢印、男、女、太陽、月、土地、目、手など、100種類の絵文字を組み合わせて単語を作る。旅行者は、人＋車輪＋土地、ホテルなら家＋人＋車輪といった具合。そこで太田はLoCoSの研究成果の一部、単語や文例をスライドで20～30枚オーストラリアのシドニーに送って見てもらった。彼の「太田さん、あなたは私の同志です。」と書かれた返信には、親切なアドバイスなども書き添えてあった。

1966年秋に私が帰国してすぐに勝見先生から電話があり、「東京造形大学に来てみないか」とお誘いを受けた。東京造形大学の設立はその年の4月。先生は大学設立のために桑沢洋子初代学長（桑沢デザイン研究所所長）を支えて尽力された。東京造形大学は八王子駅からさらに離れた場所にあり、土地勘がなくどう行けば良いかわからず、約束の時間を2時間近くも遅れてしまった。近くには民家もなく真っ暗。山中のキュービク型の白い校舎の1箇所の窓に明かりが灯っていて、その学長室で勝見先生は待っていてくださいました。着いてすぐ遅れたお詫びをしたが非難の一言もなく、先生のご配慮により、私がイタリアで研究してきた絵文字・絵ことばのピクトグラムについて、東京造形大学の専任として世界最初の授業を立ち上げて教えることになった。また、勝見先生のご推薦をいただいて、銀座松屋のデザインギャラリーで、私の開発途上の視覚言語を発表する機会もいただいた。その展覧会で研究してきた絵文

字・絵ことばを、家族や恋人のように心が開かれた親しい間柄の会話「LoCoS (Lovers Communication System)」と名づけて仮称するようになった。

LoCoS最大の特徴は、単語の形と意味と発音までが連携しているのので、4~5歳の幼児から高齢者まで、誰でも1~2時間でマスターできることである。初め発音は無視していたけれど、講演するたびに質問される。梅棹忠夫さんが主任だった京都大学の人文科学研究所での講演でも、全国から出席された関係者から、やはり発音の質問を投げかけられて困ったので、4日ほどの集中した検討で、イタリア語と英語と日本語の共通の母音5種類を枠内の位置で区別し、全ての単語の形の要素18種類を使って子音も発音できるようにした。

東京造形大学の専任になって間もなく、週の半分を勝見先生が1959年に創刊した既刊『グラフィックデザイン』誌の編集デザインの仕事を兼務したい、と桑沢学長に申し出たところ、「うちの大学は給料も安いので、兼務していただいて結構ですよ。」との了解をいただいた。日英2ヶ国語のグラフィックデザイン編集部は、スポンサーを講談社に代えた19号から虎ノ門に編集部を置いていた。東京造形大学のある八王子の先の橋本から虎ノ門までの中間にあたる国分寺に数年仮住まいしてから、隣に新駅ができた西国分寺に居を移し、虎ノ門から夜帰宅できるのは、いつも決まって終電近くだった。

太田の個人的研究だけでも忙しかったのに、大型コンピュータだけしか存在しない時代にIBMがLoCoSをそっくり買い取りたいと申し込んできた。それを週刊誌や学習雑誌などが報道したので、身の回りが騒がしくなった。連日各種のマスコミが取材に集中し、ドイツのミュンヘン大学の主任教授などは、「東京・太田」だけを頼りに、勝見先生の提案で立ち上げた神田神保町のピクトリアル研究所までを探し当てて、共同研究のため招聘し

てくれた。

ピクトグラムデザインの推進を始めていたアメリカの文化人類学者マーガレット・ミードとウイーンのアインタイプ研究所、それに前述のICOGRADAやC.K.プリンスなどを共同研究ネットワークとして、案内書の冒頭に掲載。グラフィックデザイン誌42号では、ナチスによってウイーン市のアインタイプ研究所が潰された歴史を含む長文のレポートを掲載できたので、太田はその42号の1冊をロンドン市内のノイラート宅へ持参して手渡した。マリーさんは涙ながら喜んで、天井を見上げた。そこには随分太ったオットー・ノイラートの大きな写真が飾られていた。「私も歳だから、アインタイプ研究所のピクトグラム成果をどこか大学にでも委ねなければならないと思う」とポツリとつぶやいた。

オットーがマリーさんと共にナチスの弾圧から逃避し、小船に飛び乗ってドーバー海峡を渡りロンドンに亡命して亡くなるまでの5年間、親密な交流を持ったのがマリーさんのアインタイプ展覧会のパネル解説文を書いたルドルフ・モドレイ。名著『コミュニケーションの歴史』の紹介文は、勝見先生が美術出版社で世界の名著100選を企画・監修した時の、最初の1冊としてシンボル役を果たした。

コンピュータが普及し人類のコミュニケーションの歴史が大きく改変したのに、今もって未来を含むその歴史を展望している本がないことを、長年、太田は苦慮して、3mの長さの障子紙に筆で長文の依頼状をしたためて、京都から東京に来られる鶴見俊輔さんに東京駅で3時間会ってもらい、執筆をお願いした。「太田さんが書いたらどうなの」と言われて、太田が永年会員であった「思想の科学」誌の頁を20ページほど与えてくれた。仕方なく勝見先生に同じお願いをしてみた。「ああ。わかった」と言ってくれたけれど、1983年、1頁も書かなくて亡くなってしまった。

青山葬祭場で勝見先生の大規模な葬儀をした時、太田は葬儀委員長亀倉さんの近くで全体に目を配った。葬儀はグラフ

ィックデザインの国際組織ICOGRADAを入れて13団体の共催となった。お香典は勝見勝著作集全5巻の刊行費用にあてがうことに定めて、監修：亀倉雄策+清家清+原弘、各巻解説を阿部公正+榮久庵憲司+杉浦康平+田中一光+安野光雄で担当した。各巻平均360頁、定価=36,000円、装丁=原弘+山崎登、講談社刊の箱入りになった。太田はこの全集にもれがあつてはいけなさと考えて、一人で多摩美大の図書館の書庫に半年間、缶詰になって調べ続けた。

お香典の残り200万円ほどを使って、13団体の中の5団体を選んで、勝見勝賞の懸賞行事も立ち上げ、日本デザイン学会が一番熱心に対応してくれたけれど二週りした頃に途絶えてしまった。原因は副賞の著作集の残部品切れではないのかと思っている。けれども勝見勝賞の展覧会を銀座の大日本印刷のggg（ギンザ・グラフィック・ギャラリー）で開催した際には、田中一光さん提案の10年分のオリジナル表彰状デザインを中心に、100号で終刊したグラフィックデザイン誌と掲載資料の展示そして三日間のセミナーを行い、立派な展覧会になった。

いつだったか覚えていないが、日本デザイン学会が東京藝術大学で日本デザイン学会展を開催したことがある。会場の手前3分の1ほどのスペースは、勝見先生の業績ばかりの展示であった。1970年代に「日本のグラフィック・デザイン展」と題する大きな展覧会が、銀座の松坂屋と西銀座のマリオン（元朝日新聞社）で催されたときも、太田が多摩美大でお世話になった多摩美大創設者の杉浦非水先生（三越デパート）と山名文夫先生（資生堂）の作品が主要な展示となっていた。

ピクトグラムデザインの根幹は、「便化」のデザインを活用することだ。それは日本画出身の杉浦先生の授業を1~2回受講しただけでよくわかった。太田の実家は呉服屋で、全ての日本人は人生の冠婚葬祭に際して紋付を身につけるため、辞典のような紋帳を使う。紋張以外は幼児の

絵本など1冊もない呉服店の座売りの間で、主客の楽しく交わされる話を聴きながら、紋帳だけをおもちゃにして太田は育ってきた。その世界最高の評価の3本指に入る家紋のデザインには、「便化」技法が生かされていたからだ。

東京造形大学の時代にNHKのテレビ番組「徳川家康」が放映された。その番組に登場する全ての武士の家紋に間違いがあってはいけない。そのため八王子の並木紋屋さんが歴史考証で協力された。その並木さんに太田の授業にも来てもらい、夏休みの宿題に自分の家の家紋を10cm角で描いて提出させた。並木さんにはそれから40点ほどを見てもらい、講評を願った。

「これがデザインというものでしょうが、家紋と言えものは1点もありません。」とだけ言われた。太田はその意味するところは何かを30年間、考え続けてようやく分かった。

その後、政府から国際貿易で日本のデザイン盗用などが世界で悪評になっているので、日本の優れた文化を紹介する映画を作ってくれと頼まれた。並木さんに再度登場いただき、「日本の紋章」と題する映画を作り、東京造形大学での太田の授業のワンショットもその中に入れてみた。

並木さんが竹で手作りしたコンパスの2本軸は固定しない。持ち上げると2本はぶらぶら。それを指のコントロールで正確に描く。絹の着物は絹糸が縦横に織られて、でこぼこ。しかも筆につけた墨色の黒は、その着物に筆の墨が触った瞬間、織り目に染み込んで広がる。白いラインの線を綺麗に塗り残すだけでも実に大変だ。紋を描く白い円形の真ん中に針を1000回でも狂わずに刺すという。

40人ほどの学生の作品を講評する山名先生の授業はいつも、初めの9割の時間は一言も話さない。30~40人の学生たちも黙って見ているだけ。そして最後に30秒から1分ほどの話をされて終わる。学生の顔は満足そうだ。制作の追体験をしてからのコメントだから、学生も納得する。

山名先生の新聞広告1頁大の女性の顔などは、点描画のような線画だ。ペンの先が紙に着く時の緊張感は、文字では表現できない。

資生堂銀座の本社では、30年間アシスタントを務めたベテランアシスタントでも、山名先生の仕事部屋には、30m以内は近づけない。ところが太田は先生が成城から聖蹟桜ヶ丘に移られてまもなくご自宅にお邪魔して、製作中の先生の顔と描画中の作品の間に頭を入れて、先生の呼吸もよくわかる描画のペン先の動きをキャッチした。デザイン評論家の瀬木慎一はある時、日本のグラフィックデザインは、三越デパートと資生堂双璧の時代に入るかもと形容していた。

勝見先生はデザイン界の法皇とも呼ばれ、政界の吉田茂のように「ばかやろう！」の怒声で誰からも恐れられていた。けれども太田が関わらせてもらった20年近くは、一度もそのようなことはなく、太田に対していつも丁寧な言葉遣いで紳士的であった。1983年に広尾のマンションでベッドに横になったままの先生に、最初にお別れに行ったのは太田だった。手を伸ばせばすぐ手に触る高さまで平積み一番上に、ランスロット・ホグベンの著作の表紙が見とれた。太田が先生にプレゼントした一冊だった。

勝見勝が追い求めていたのは、本来、生活(者)のためのデザインではなかったのか、と太田は思う。読売新聞が新聞の解説欄で勝見勝について、太田と同様の指摘を書いているのを読んだことがあった。先生は自分の中の微かな本音に気づいて、現実の自分とのギャップに腹が立つ。特に家族への対応で自分の本音と逆の対応をして余計に腹が立つ。趣味の登山で単独行を好んだのは、そうしたギャップがない環境だからだ。

東京造形大学に勤めていた時、二人並んで廊下を歩きながら最重要な相談を聞かせてもらった。「ウィーンのアイスタイプ研究所の研究成果を全て、東京造形大で預かることはできないだろうか。」太田

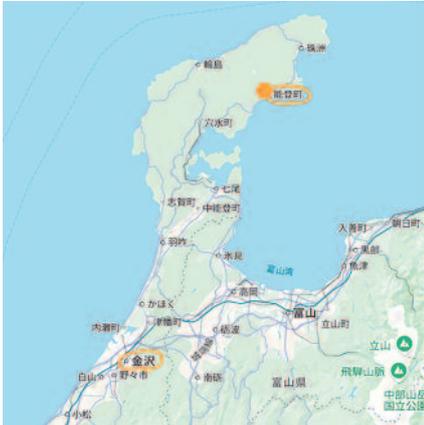
にとって一番大きな重要な話題だったが、わずかに2~3分で答えを申し上げた。引き受けるとすれば、人、組織、予算など、どれも太田一人で対応せざるを得ない。太田の人生を投げ打っても満足できる成果にはならないだろう。「無理だと思います。」と答えた。その結果、ロンドン郊外のレディング大学のタイポグラフィ科にうってつけの先生がいるので、成果の全てが委ねられた。編集デザインに30人の協力と10年の執筆編集作業を経て、A4判800頁ほどの日英2ヶ国語の『ピクトグラムデザイン』が明日入稿できるという時、出版社の社長が編集室に来て、このまま出版すると1冊が40,000円になる。とても売る自信がないので、ページを半分にして欲しいと言ってきた。一緒にきた女性の社員は、破棄するページでもう一冊をつくったら、と提案してくれたが、断った。

ようやく仕上げた完全版下を半分破棄して、出版社ではなく、日本最大手の日本書籍販売(株)によって1冊20,600円で世界の大手書店に4,000冊、超豪華本として卸した。ピクトグラムに関する図版は、ロンドンのレディング大学のタイポグラフィ科に写真を撮って有料で送ってもらい、スムーズに出版できた。1年もせず世界の大学や先生などに行き渡ったので、4,000冊は全て売り切ったことになる。増刷をしたいと言われたが、学生の教科書として安くなるならと答えたところ、ページ数をまた半分にして、普及版5,500円で40年間、販売が続いている。それゆえ、ここ40年の間、世界はピクトグラムの新書を1冊も出版させないで、太田の著書だけの状態を続けている。ただし太田の著書を凌ぐものが現れれば、当然出版されるだろう。それはどんな1冊なのか、はやく見てみたいような気もする。(太田のブログ http://note.com/otayukio_design)

●
EDplace

能登町宇出津「あばれ祭」と地域研究拠点・宇出津ラボ ～能登半島地震被災の見学報告～

上綱久美子 (design office kk)



左: 図1 能登町位置図
上: 写真1 のと里山海道周辺道路の被災状況

1. はじめに

環境デザイン部会では、1995年阪神・淡路大震災、2011年東日本大震災、2016年熊本地震など震災による被災状況視察や特集企画を行なってきた。2024年元日に発生した能登半島地震の被災状況等に対する活動や提言等についてはまだできていない。

2024年夏の本部会幹事会において、北陸地区の部会員である豊島先生より、被災復旧途上にもかかわらず、地元が開催を決定した能登町宇出津の「あばれ祭」と「地域研究拠点・宇出津ラボ」(以下、宇出津ラボ)となる家を是非見に来てほしいとご提言された。豊島先生は宇出津ラボの所有者で、前の所有者であるK氏家族と豊島先生とその教え子らがそこに集まるという。私は本部会の見学会企画の予備調査を兼ねて参加することにした。

2. 金沢から能登町宇出津を目指して

2024年7月6日(土)午前、金沢駅周辺でレンタカーを借りて宇出津ラボがある能登町宇出津(図1上部橙色丸の場所)を目指した。通常、金沢から車のアクセスは、「のと里山海道」を通って、直近のICで下り一般道を通って能登町宇出津に向かう。今回もルートの同じだが、被災して半年が経っても陸路の大動脈であるのと里山海道は傷だらけで迂回や注意走行など、神経をすり減らすような道中の景観と環境であった(写真1)。片道4時間ほどかけて宇出津に入り、K氏のご厚意で提供していただいた駐車場に車を駐め、宇出津ラボに向かった。

3. 地域研究拠点・宇出津ラボ

宇出津ラボは、材木業を営んでいたK氏の先々代が明治時代に建てた二階建て木造家屋で(写真2-4)、2023年12月末にK氏から豊島先生に所有が代わった。K氏は解体を考えていたというが、豊島先生はご研究の一環として解体せず、改修して地域の交流拠点として機能させることをお考えだった。宇出津ラボは、能登町宇出津地区の地域特有のあばれ祭を中心とした住民とその周辺の人々の集まり方や交流のあり方を端緒に、日本全国の地方や地域でも再現できるコミュニティ形成や持続可能なつながりの核となる場づくりの試行ということだ。K氏は、豊島先生のそのビジョンに賛同されて快く家屋を譲渡されたという。そして1週間後の2024年元日に地震が発生した。

4. あばれ祭

宇出津あばれ祭は、石川県無形民俗文化財の勇壮な祭りであり、これを皮切りに能登地方の夏祭りが始まる。350年前に悪病が流行したため、京都の祇園社から牛頭天王を招請、盛大な祭礼をして悪疫病者を救った。それを喜んだ地元の人がキリコを担いで八坂神社へ詣でたのがあばれ祭の始まりとされる*。高さ7メートル、約40数本の奉燈(キリコ)が町を練り歩き、2基の神輿を海や川、火の中に投げ込んであばれる壮漢な海の祭典として知ら



写真2 宇出津ラボの正面



写真3 土間



写真4 階段下収納



写真5 あばれ祭ポスター

れている。平成27年には日本遺産に認定された。正月に帰省せずともあばれ祭には帰省するほど地元住民には大事な行事であるとのこと。毎年7月の第1金曜と土曜日に開催される(写真5,6)。

5. 宇出津ラボとあばれ祭～地元の方々と の交流～

7月6日午後、宇出津ラボでK氏ご家族にお会いした。K氏は現在金沢にお住まいとのこと。能登半島地震による大きな被災は免れたものの、架構造の傾きや土蔵壁の被災等の復旧で、宇出津ラボはマイナスからのスタートという状況だ。

2024年のあばれ祭は、被災に屈することなく開催を決定した。開催中は、実家や知り合いの家で夜通し集まる伝統があり、宇出津ラボ前身K氏宅も同様であったようだ。私が訪ねた7月6日の夜も豊島先生と教え子の学生さん、K氏ご家族らが集まり賑やかに過ごした(写真7)。

6. 能登町宇出津周辺の被災状況

宇出津から車で20分ほどのところに、



写真6 町を練り歩くキリコ群

私が大学講義で紹介する町の観光交流施設「イカの駅つくモール」(2020年開業)がある。講義では、ストリートファニチャーの借り物デザインの題材として、なおかつCovid-19感染症対策の国の地方創生臨時交付金の一部がこの巨大なイカのモニュメント費用に充てられたことを取り上げる。実際に施設を見るために行ってきた(写真8,9)。ここも被災して、休業・補修を経て2024年4月から営業再開。震災後この施設周辺は全国から応援に来ている警察の拠点となっていることは、その時警備にあっていた警視庁職員と話してわかった。

7月6日の宿泊は能登町では見つからず、和倉温泉旅館「花ごよみ」に宿をとった。後で知ったが、復旧要員以外の観光客受け入れを震災後の和倉温泉で最初に再開した旅館だった。和倉温泉の宿泊施設の被災状況はかなり深刻だ(写真10)。

私見だが、Covid-19感染症対策の国の地方創生臨時交付金の一部を充てた巨大イカモニュメント「イカキング」については、過疎地である当該地の状況と今回の



写真7 宇出津ラボでの集い

震災被災を通して、当該地に立脚した事象の流れから見るとある意味、正解だったように思う。被災地経済支援のため、イカの駅つくモールで冷凍イカやその他特産物の購入と発送と、和倉温泉の宿泊で少しは復興支援として貢献できたならと願う。

7. おわりに

私は、阪神・淡路大震災、東日本大震災、能登半島地震の三つの震災後の状況を視てきた。いずれも環境デザインの視点で視てきたつもりである。環境デザイン部会では、阪神・淡路大震災と東日本大震災の被災地視察、熊本地震では現地の見学会を行っており、EDplaceに記録が残っている。今回、豊島先生が宇出津ラボを通して能登町被災後の環境デザインについてご研究・尽力されている。環境デザイン部会として何か力になればと率直に思う。まず、環境デザイン部会として現地視察することを提案したい。

最後に、豊島祐樹先生には大変お世話になり、心より謝意を申し上げる。



写真8 イカの駅つくモール全景



写真9 イカキング



写真10 和倉温泉施設の被災

シンガポール、Singapore

中嶋猛夫（女子美術大学名誉教授）

シンガポール (Singapore)

1. 都市

シンガポールは東南アジアにあるマレー半島の南端にある島で国家で首都という都市国家で面積は約720km²で東京の23区全体とほぼ同じですが、熱帯モンスーン気候に属し熱帯植物に被われ年間を通して高温多湿で27℃前後の常夏の緑豊かな国です。

人口は東京都の半分程の約570万人で中国系、英国系、マレーシア系、インド系など多民族国家で夫々の言語が公用語となっていますが英語が主要言語です。経済的には貿易と金融と観光で繁栄し、近年はアジアの金融センターで高所得層が増えています。20世紀末には世界都市ランキングでニューヨーク、ロンドン、パリ、東京、香港に次ぐ第6位になり、2020年に国民所得はカタールにつき第2位です。

歴史的には1819年に英国の東インド会社の書記のラッフルズが中継貿易地点として港湾開発を始めて発展し、後に英国の植民地に成りました。第二次世界大戦中は一時日本が占領し、その後再び英国領と成り、1965年独立をしました。

島の中央南部の港の周辺が都心で高層ビルやホテルが立ち並ぶオフィス街で、所々に戦前からの旧市街が残っていて、植民地時代からの建物やホテル、中華街や様々な民族の町と宗教施設があります。また繁華街のオーチャード街には各国のデパートや有名ブランドショップが並んで繁盛しています

郊外には独立以来の方針で国民に住宅を供給するために高層住宅が林立し、クリーンな町造りの為に様々な法規制があります。交通に関してシンガポール島東端に年間7000万人程が利用するチャンギ国際空港があり、総延長216km、140駅を結ぶMRT（新都市交通電車）やバスが都心や郊外と繋がる便利な交通網があり一日300万人程の人々を運んでいます。

シンガポールの繁栄は、建国の父とも言われる首相リー・クアンユーによる政策で、貿易と金融による経済発展と共にガーデンシティ構想の基に緑化政策に力を注ぎ、現在見る緑豊かな繁栄する都市国家が実現しました。



図1：シンガポールの位置



図2：シンガポール島とMRT交通網と中心街



図3：MRT（新都市交通）駅



図4：都心のオフィス街



図5：マーライオンとマリナベルレイHOTEL



図6：繁華街オーチャード通り



図7：中華街と仏教寺院



図8：ラッフルズHOTEL



図9：屋台集合食堂：ホーカーズ



図10：郊外の庶民用高層住宅群

2. 緑化政策

シンガポールは1960年代より建国の父と言われるリー・クアンユー首相がガーデンシティにする理念で単に都市開発をするのではなく、自然保護区を残して様々な施策を行って来た。

①チャンギ空港 (図11)

発着回数年間38万回を数える巨大空港で、施設は主として3ターミナルにより成り、中央部にジュエルという楕円形7層の巨大ショッピングセンターがあり、中心部が上部5層が吹き抜けて、資生堂パレーという植物園でその中央に巨大な円形の滝があり、空港内を循環するモノレールが突き抜けて走る壮観な施設が2019年に完成している。

②ガーデنز・バイ・ザ・ベイ (図12)

シンガポール中央部のウォーターフロントの南に2012年に出来た101haの複合緑地公園で、ガラス張りで大滝がある植物園のフラワー・ドームや高さ25~50mもある巨大植物に見立てた鉄塔スーパーツリー・グローブ (図13) や中国風庭園等見所も多い。

③パークロイヤル Pホテル (図14)

政府の政策により新設のビルは緑化され、中心部のエリアのホテルも緑化されている。

④植物園 (図15)

シンガポール島の中央部にあり、1859年に開園した歴史ある施設で世界遺産で、82haの広さが有り、様々な南洋植物の他に世界的にも有名な蘭ガーデンがあります。

⑤動物園 (図16)

1973年に開園され現在は28haの広さに160種1600点も生き物が居てオープンズーと言われる自然環境に近い状態で接する事が出来る。

⑥セントーサ島 (図17,18)

シンガポール島南端の小さな島で、本来自然環境のリゾートであったが、近年様々な娯楽施設が建設され歓楽街の様相を呈している。

⑦緑の散策路 (図19)

シンガポール島には諸処に自然保護区があり、散策路が設置されている。長さ274mのベンダーソンウェーブ橋。

⑧高級住宅 (図20)

植物園周辺には富裕層や政府高官、大使館など庭付きの高級住宅が並び、日本大使公邸の建築は清家清、庭と外構は筆者の中嶋が担当。

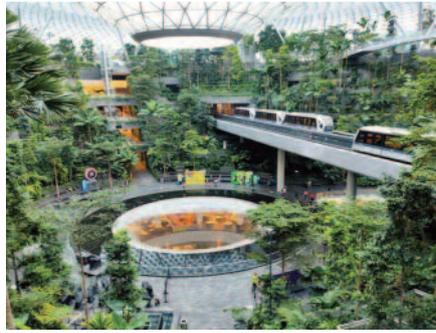


図11：チャンギ空港 SSジュエル



図12：ガーデنز・バイ・ザ・ベイ



図13：スーパーツリー・グローブ



図14：パークロイヤル Pホテル



図15：植物園内のオーキッドガーデン



図16：動物園 エレファントガーデン



図17：セントーサ島のビーチ



図18：セントーサ島のエンタメ施設



図19：ジャングルの中の散策路



図20：日本大使公邸正門

ワンダーな世界は身近に！

佐々木美貴（環境デザイナー・江戸川区子ども未来館）

●

仕事場の江戸川区子ども未来館(図★A)は一級河川江戸川の河岸近くにある。四季折々の自然環境がさまざまな生物との出会いをもたらし、その都度驚かされる。特に江戸川区と市川市の境界が未確定なエリアには、植物も絶滅危惧種と特定外来種が混在しながら自生するなど、子どもたちにとっても興味尽きないワンダーな場所のひとつ。

ここは旧江戸川と江戸川放水路が分岐する場所でもあり、放水路の行徳可動堰(図★B)から新行徳橋にかけての帯は絶滅危惧種「トビハゼ」の北限として保全されている。

子ども未来館では、教材としてさまざまな水生生物を飼育している。淡水や汽水の魚類、カニなどの甲殻類等30種以上を常時展示しているが、1年ほど前にはタツノオトシゴのなかま、「ガンテンイシヨウジ(ヨウジウオ)」が加わった。(画像1)ヨウジウオは困ったことに、生餌しか食べないらしい。飼育担当スタッフがさまざまな試みてみたが、適しているのは汽水にすむ小さな甲殻類「ニホンイサザアミ」だけであった。



周辺地図

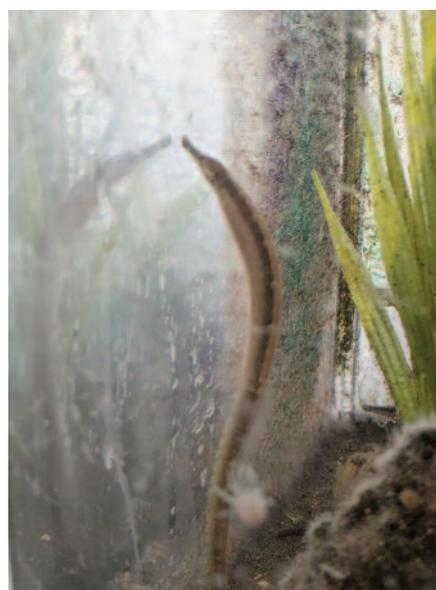
子ども未来館の高木嘉雄氏(2023年JSSD春季大会OSパネラー)はプログラムに用いる生物やその餌を採集するテクニックに長けていて、餌の「アミ」を探して江戸川放水路(図★B)に通いを続けていた。

2024年7月12日のことだった。水を掬ったプランクトンネットの小さな管が何かで詰まってしまい、容器に移したところ透明なゼリー状の物体が確認されたと言う。魚卵かなとも思ったが気になり持ち帰って水槽に移したところふわふわ動き出した。小さなクラゲのようでもあるけれど触手がよく見えない。

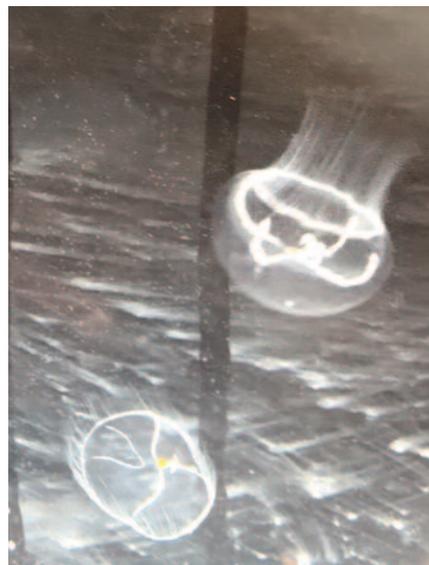
図鑑やネットで調べたがぴったりのものがなかったので、とりあえず画像を撮り東京湾の生物に詳しい方々に片っ端から送ってみたのだそう。見解はバラバラ、どうもしっくりこなかったのが江戸川区の友好都市山形県鶴岡市にあるクラゲで有名な加茂水族館(奥泉和也館長)に問い合わせたところ、世界でも長崎県の二か所でしか採集例のない「ワタゲクラゲ(Malagazzia hirsutissima)」(画像2)であることが判明した。

本州では初発見の事例なのでその後葛西海浜公園や船橋三番瀬海浜公園などでも調査したが見あたらない。いったいどうして大村湾のクラゲがすみついたのだろうか?他の場所にもいて気づいていないだけなのだろうか?繁殖はどのようにしてなされているのだろうか?わからないことばかり。海洋や干潟の生物相はまだごく一部しか解明されていないという。温暖化による影響など探究への興味尽きない場所は身近にたくさんあったので

ある。それにしても、東京湾の水はずいぶん過ごしやすい水に戻り、生物がたくさん住むようになってきたと実感したのである。



画像1 ヨウジウオ



画像2 ワタゲクラゲ

清水泰博退任記念展

山内貴博（京都美術工芸大学）

本部会とKAN-NO-KAI※合同で、清水泰博退任記念展の観覧及び懇親会（図1～4）が行われた。11月23日（土）、会場は東京藝術大学大学美術館 陳列館1、2階である。清水先生から展示の丁寧な説明を頂きながら観覧することが出来た。内容は都市からランドスケープ、橋梁、建築、インテリア、イベントディスプレイ、モニュメント、ストリートファニチャー、家具とプロダクトといった様々なスケールの提案や作品があり、その共通項は庭づくりであると述べられた。筆者は環境デザインとは「空間的領域横断」と考えているが、清水先生はまさに実践されているデザイナーだと思う。会場にあったごあいさつの抜粋を以下に記す。

「すべてが庭になる～人の居場所をつくる」

東京藝大デザイン科に環境デザイン講座が開設されたのが1978年、私はその3年後の1981年に大学院（環境造形デザイン研究室）に入りました。その後、設計事務所勤務の後に京都で独立して個人事務所を始め、2002年に東京藝大に教員として戻りました。戻った時の研究室名は「空間造形デザイン」で、名称はその後「環境・設計」となり、今の「Design Place」に移り変わりました。次第に自分にはじっくりするようになったように思っています。そして23年が経ちました。独立して自分の仕事を始めてからも既に40年近く経っていて、その間何かのジャンルに収斂することなくやってきたように思います。環境デザインではそのようなこ



図2 2階東側（筆者撮影）



図1 展覧会チラシ（<https://museum.geidai.ac.jp/exhibit/2024/11/kiyomizu-design.html>）

ともあるのかと今は思っています。退任展にあたり、若い頃のコンペや自主提案など構想だけで終わってしまったものも改めてまとめてみたく思い、昔のトレペに描いていた原図を探し出してデータ化し、当時のように改めて着色してみたのが1Fの展示です。これらは未完に終わった、私の夢見たさまざまな都市への提案です。この色塗り作業は私の研究室の院生や学部生にお願いしたものです。

また個々の実現した仕事を中心にその時に何をテーマにしていたのかを思い返しながら、それを既存ジャンルに捉われことなく分類しまとめることにしました。それが2Fの展示になっていて、12に分類され、多くが「場所」についてものになりました。このような作業をすることによって、退任展は私自身の貴重なふりかえりの機会になったように思います。

そしてその過程で思ったことがタイトルの「すべてが庭になる」です。日本語

の「庭」には水や植物や石がある空間だけではないもっと広い意味があるようで、私にとっては「人の居場所」です。それが小さくなると椅子になるのだろうし、大きくなると都市になるように思っています。そうすると私はずっと「庭づくり」をしてきたのではないかと思うようになりました。だから「すべてが庭になる」は「私がやると」をあたりに付けることも出来ますし、「日本の空間は」と付けてもいいように思っているのが今の心境です。

最後に、ご助言を頂いた先輩の先生から同僚の先生方、取りまとめに奔走してもらった助教や助手の皆さん、またいろいろ手伝ってくれた卒業生や在学生の皆さんに御礼申し上げます。

清水泰博

※KAN-NO-KAI：東京藝術大学 環境造形デザイン専攻を主とする同窓生の集まり



図3 3階西側（筆者撮影）



図4 懇親会（筆者撮影）

「学術研究の展示デザインによる可視化と伝達」

伏見清香（放送大学）

2024年12月19日（木）、「学術研究の可視化と伝達」をテーマの軸として、東京大学総合研究博物館で、見学・講演会を実施した。大学博物館における展示の視点から、東京大学総合研究博物館客員教授の洪 恒夫先生に、現在展示中の特別展「異形の美学」と常設展「UMUTオープンラボ」（“展示型収蔵”を基軸とした展示）を、実際に博物館内を見学しながら解説していただいた（図1）。収蔵スペースと研究スペースの不足という課題に対し、収蔵庫そのものを展示すると同時に、研究活動を展示するという画期的な手法でスペース不足の問題を解決している。それに伴い、一般の来館者にとっては、研究のバックヤードが見学でき、大学博物館ならではの学術研究の展示と活動を垣間見る事ができるのである。

その後、博物館7階のミュージズホールに移動して、標記テーマの過去の事例として「石の記憶—ヒロシマ・ナガサキ展」（研究の足跡を追体験した展示）等も含めて取り上げ、それらの企画デザインから製作について、写真や図を交えながら講

演を実施していただいた（図2）。

さらに、世界各地にあるデザインミュージアムが、日本にはまだ無いため、JDM：ジャパン・デザイン・ミュージアム構想についても紹介していただいた。日本デザイン団体協議会（DOO）と東京ミッドタウン・デザインハブとの共催で2024年秋に実施された企画展では、1950年代から2020年代までの日本のデザインを振り返るクロニクル（系譜図）の展示もあった事が説明された。デザインミュージアムが実現すれば、デザインの収集と共に、教育と研究の場としても重要な拠点となり得るため、実現が期待される。東北、北陸、九州など、定員の20人を超える26名の参加があり、活発な質疑応答が行われた。

・講演テーマ：
「学術研究の展示デザインによる可視化と伝達」

「JDM：ジャパン・デザイン・ミュージアム構想紹介」

・講師：
洪恒夫先生 東京大学総合研究博物館客員

教授、
日本デザイン団体協議会（DOO）
ジャパン・デザイン・ミュージアム設立
検討委員会（JDM）委員長

・日時：
2024年12月19日（木）16:50-20:00
17:00～17:30 館内展示見学（UMUTオープンラボ・異形の美学展）
17:30～17:40 移動
17:40～18:50 ミューズホール（博物館7階）にてメインテーマレクチャー
「学術研究の展示デザインによる可視化と伝達」
18:50～19:00 質疑（メインテーマ終了）
19:00～19:20 JDM構想紹介
その後適宜挨拶、意見交換
20:00 終了
・会場：東京大学総合研究博物館
（東京都文京区本郷7丁目3-1）



図1 博物館内での学術研究展示説明



図2 博物館7階ミュージズホールでの講演

事務局報告

●長谷高史先生、伊藤孝紀先生、森田昌嗣先生の受賞報告

2024年度日本デザイン学会 特別賞に長谷高史先生、優秀研究賞に伊藤孝紀先生、功労賞に森田昌嗣先生が選ばれました。11月9日日本デザイン学会秋季企画大会(千葉大学墨田サテライトキャンパス)で表彰式が行われました。受賞理由として、長谷先生は「環境デザインを主とした永年の制作実績及び学会活動、若手研究者、デザイナーの育成等の功績」に対して、伊藤先生は「環境演出の体系化に基づくデザイン方法の提案と展開に関する研究」に対して、森田先生は「長年にわたる学会運営ならびに学術活動においての特段の貢献」に対してと表彰式で紹介がありました。

お祝い申し上げるとともに、皆様にご報告します。



表彰式会場にて 長谷先生と伊藤先生

EDplace

●展覧会の開催のお知らせ

本編でも紹介しておりますように、2025年11月15日(土)～23日(日)の会期中で、東京表参道のTIERS GALLERYにて環境デザイン部会EDplace100号発行記念展覧会「EDplace 100th Memorial: 環境デザインのこれまでとこれからについて考える」を開催いたします(p.34 展覧会フライヤー)。是非ご観覧いただくとともに、関係各所への告知ご協力をお願い申し上げます。

- ・展覧会名称: EDplace 100th Memorial 環境デザインのこれまでとこれからについて考える
- ・主催: 日本デザイン学会環境デザイン部会
- ・会場: TIERS GALLERY (東京都渋谷区神宮前5-7-12 TIERS 3F / 東京メトロ「表参道」駅A1出口より徒歩3分・「明治神宮前」駅4番出口より徒歩4分・JR山手線「原宿」駅より徒歩10分)
- ・会期: 2025年11月15日(土)-23日(日) 11:00-19:00 / 入場無料
- ・展示内容: EDplace100号分の記事アーカイブ(WEB版、合冊版)、100号までの変遷がわかる年表、テキストマイニングによる記事分析、関連事例についてのマケット、解説資料、関係者へのインタビュー映像、ギャラリートーク、ワークショップなど(予定)

●日本デザイン学会 第72回春季研究発表大会のご案内

次年度の春季大会は以下のとおり開催予定です。

- ・開催日時: 2025年6月27日(金)
- ・場所: 札幌市立大学サテライトキャンパス アスティ 45 12F、16F (札幌駅前)
- 2025年6月28日(土)-29日(日)
- ・場所: 芸術の森キャンパス(札幌市南区)
- ・大会テーマ
「くんずほぐれつ、デザインする」

なお環境デザイン部会では、本大会にてオーガナイズドセッション、テーマセッションを予定しています。是非ご参加ください。

- ・オーガナイズドセッション: 6月29日(日)

テーマ: EDplaceアーカイブから考える環境デザインのこれまでとこれから

パネリスト(予定):

司会: 森山貴之(環境デザイン部会主査)
報告者: 上綱久美子/川合康史/小泉雅子/長谷高史/伏見清香/水津功

概要: 環境デザイン部会の機関誌として1985年から発行しているEDplaceは100号を迎えた。

EDplaceの100号分、40年間の蓄積には、人間の「環境」の変化とそれに対応べく実践してきた「知」が凝縮されているといえる。

とりわけ阪神淡路大震災以降のたび重なる災害は、わたしたちの日常環境の不安定さをあらためて認識させることとなった。また人口減少が深刻化するいっぽうで仮想現実や人工知能が著しく発展するなか、人間存在そのものあるいは「知的営み」のありようが大きく転換しようとしている。こうした時代・社会の変化に向き合いながら、環境デザイン部会は私たちの「生」をデザインする知の集まりとして、多様な対象について調査研究を行ってきた。

このオーガナイズドセッションでは、これまでのEDplace100号分の分析から見て取れる環境そして環境デザインの変遷を俯瞰しながら、「これから」の環境デザインについて考えてみたい。

なお本セッションは、2025年11月に予定している環境デザイン部会主催企画展のためのオープンディスカッションとして位置付けるものである。

- ・テーマセッション: 日時未定
- テーマ: 環境デザインをアップデートする
- 概要: 今日の間環境の変化を踏まえ、環境デザインを「ひと・くらし・自然の関わり合い」を構築するための包括的なデザイン領域としてあらためて理解し、その学術的可能性を探ります。
- *発表者を募集しています。是非環境デザイン部会のテーマセッションにてご発表くださいますようお願い申し上げます。(森山貴之)



この機関誌の始まりは1985年

第1号発行から今日の100号まで。
環境デザインを考え続けた
過去に学び、
これからのを考える展覧会。

EDplace

Environmental Design

100

memorial

2025 11/15^土 ~ 11/23^日

TIERS GALLERY ティアーズ ギャラリー 表参道
◎開催時間：11:00~19:00 (最終日は17:00まで)
◎ギャラリートーク：11/17(月)、11/21(金) <予定>
◎ワークショップ：11/19(水) <予定> 入場：無料